

日本古代史ネットワーク
第2回 解明委員会

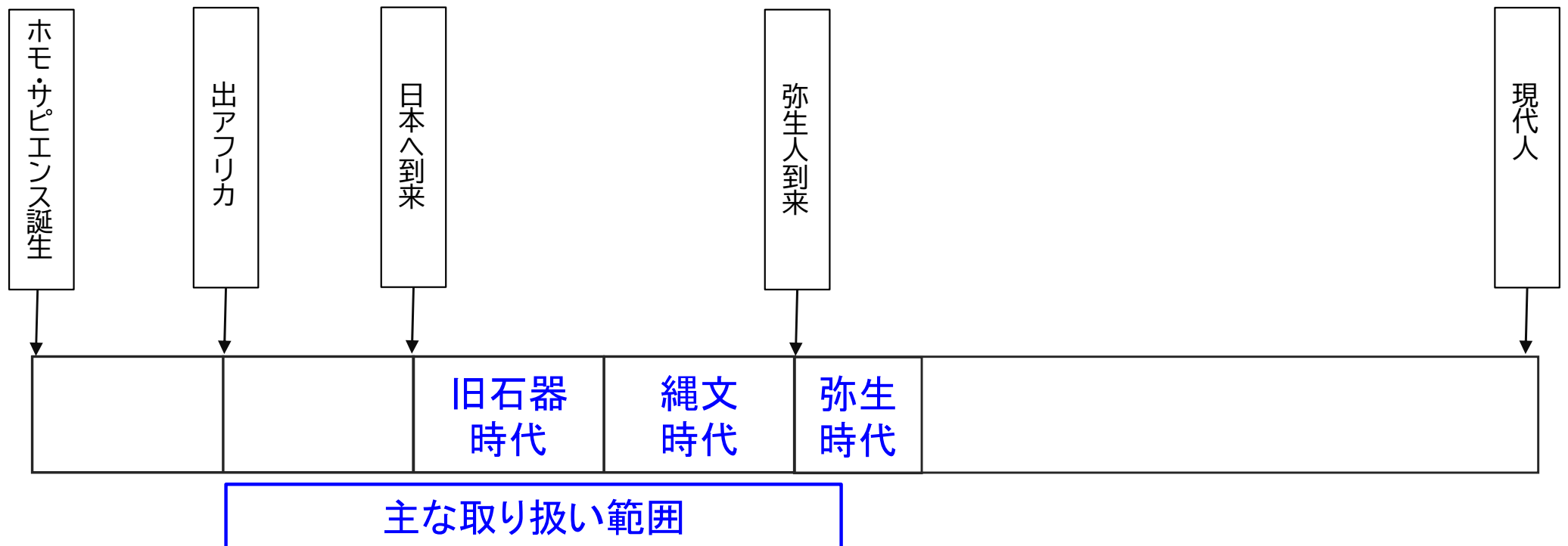
テーマ: **日本人の起源**
基本レポート
問題・課題

2021年1月23日

丸地 三郎

範囲：日本人の起源の取り扱う時期・範囲

- 日本列島(琉球列島を含む)に初めて人が到来した時期は凡そ4万年前と云われる。その人達は、旧石器人・縄文人と云われる。その後、弥生渡来民が紀元前に到来し、弥生文化を築いた。その弥生人と旧石器人・縄文人の子孫が日本人となったと云われる。
- この日本人の起源で取り扱う主な範囲は、『ホモサピエンスがアフリカを出てから日本に人が到来するまで、及び弥生渡来民の到来し、定着した時期まで』としたい。
- 日本人の起源を明らかにするために必要な期間は、取り扱う範囲に追加し含めることとする。
 - ホモサピエンスが誕生の地アフリカ大陸を出て、日本に至るまでの期間
 - 弥生渡来民が日本に来て、定着するまでの期間
 - 様々な日本人の起源論の賛否を検討するのに必要な期間



日本人の起源論の現状

1. 2010年発行された岩波書店の雑誌「科学」の4月号で国立科学博物館の溝口優司は
 - 5年前にプロジェクトを立ち上げ、日本人形成過程のシナリオを提示しようと、僅か10人ほどの同業者で試みたが、見解を統一できず、断念した経験がある。 と記している。
 - 再検討すべき課題として
 - 縄文時代人の祖先集団はいつ、どこからきたのか？
 - 弥生時代人の祖先集団の源郷は？ 移住・拡散経路は？
 - 渡来系弥生時代人の日本列島東進・北上経路は？
 - 環境要因の身体的時代変化への影響はどの程度か？
2. DNA:初の縄文人のゲノム解析の結果を発表した神澤秀明氏
 - 論文で明らかにした 日本人二重構造論と、縄文人は、北東/東南アジア人より古い系譜
 - これで、起源論の目途が付くかと思われたが、収まらなかった。
3. 海部陽介・斎藤成也 両氏の起源論も疑問を呈している
 - 出アフリカの後、ヒマラヤ南ルート、北ルートのどちらか？ 又は両方か？
 - 日本への上陸ルートは、
 - サハリン・北海道ルートか？ 朝鮮半島ルートか？ 台湾から沖縄ルートか？
4. 弥生渡来人について
 - 朝鮮半島経由との根強い意見(信仰)がある。
 - 弥生渡来人の源郷は不明
 - 渡来時期に関しては、炭素14年代測定法をベースに、3000年前とする説が出ている。
 - 弥生渡来人100万人説。 多すぎると云いながら、多数回の渡来を説く説が強い

日本人の起源を解明の材料と方法

- ヒトのルーツを解析するために、従来から使われてきた方法論がある。
 - 石器、青銅器、鉄器
 - 土器、食器、道具
 - 骨、歯、身体的特徴
- 人の起源は、言葉で伝えられた事実と風習・習慣として伝えられたこと、との整合性も必要
 - 記述された歴史
 - 民俗学、民族学
 - 伝承、神話
 - 言語、
- 新たに使われる医学・科学ベースの方法論
 - 放射性元素等による絶対年代の測定
 - ヒトのDNA
 - 病原菌・ウィルスの免疫
 - 家畜等のDNA
- 人類の移動に関わる自然環境
 - 海面の高さ 陸の形状・大きさ 海が徒歩で渡れるか？
 - 気温・気候の変化
 - 地形の変化 隆起・陥没 砂・土石の堆積

留意したいこと

- 医学・科学ベースの方法論により、正確な事実が判明してきたことは、大いに歓迎する。
 - しかし、留意したいことは、論文・書籍に含まれる二つのことに注意。
 - ✓ 調査・判明した事実：大切にしたい。解明の対象！
 - ✓ 事実を元に、著者が推論した部分：推論部分は、要注意！
 - 事実と、推論は、別けて考える必要がある。
- 論文・書籍に科学者が記す日本人の起源論に往々に見られる傾向は、
 - その分野での十分の見識は有っても、
 - 人類学、古代史、外の関連科学に関しては不十分な知識・認識であることが多い。
 - 直接調査した結果は傾聴に値するが、そこから推論された結果は肯定できないことが往々に見られる。
 - 過去数千年・数万年間の歴史的変遷を顧みず、数千年・数万年前の事象を現代の事象と比べる科学者の単なる思い付きに基づいた起源論は、やはり、いただけない。
- 人類の起源の探究は、人類の長い歴史を背景にしている。
 - 人類の歴史を背景に持ち、DNAなどの最新科学の成果を証拠として、日本人の起源を探究して行きたい。
 - 発想の新しさを大切にして、独創性・革新性を持ち、歴史的事実や貴重な研究成果との普遍性をもった起源論としたい。

現在 有力な日本人起源論

• 二重構造モデル

「日本人の起源」中橋孝博著・

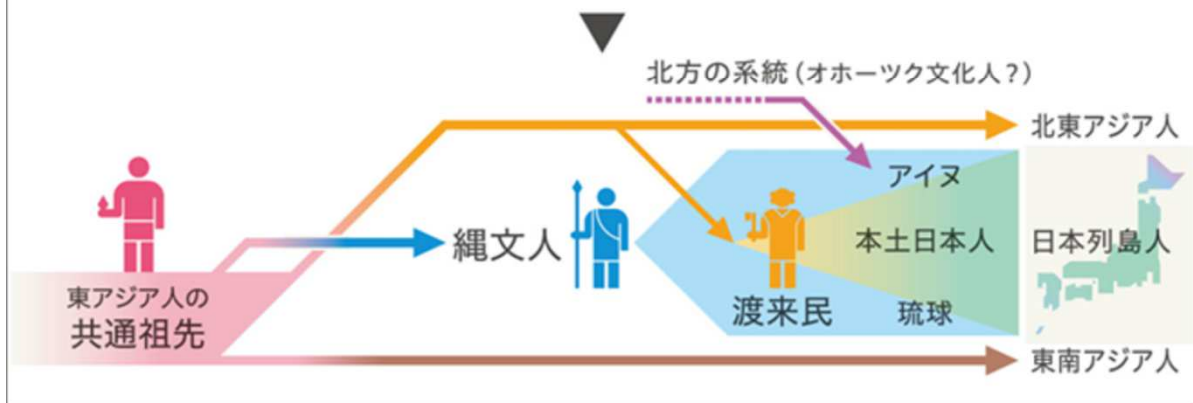
「日本人の誕生」埴原和郎著などに代表される起源論で、

早期に日本に移り住んでいた縄文人と、その後、大陸から渡来した弥生人の2種類の日本人が起源とされている。



これまでの研究

縄文人は形態的に東南アジア人に近いが、DNA分析では北東アジア人に近いという結果が出ることもあった。



核ゲノムの解析から見てきた日本列島人の成立ち

縄文人は、これまで考えられていたよりも古い時期に孤立した独自の集団である可能性が出てきた。



- 生命誌ジャーナル
- 「縄文人の核ゲノムから歴史を読み解く」
- 著者:神澤秀明(国立科学博物館)

二重構造モデル: 日本人集団の形成に関わる一仮説

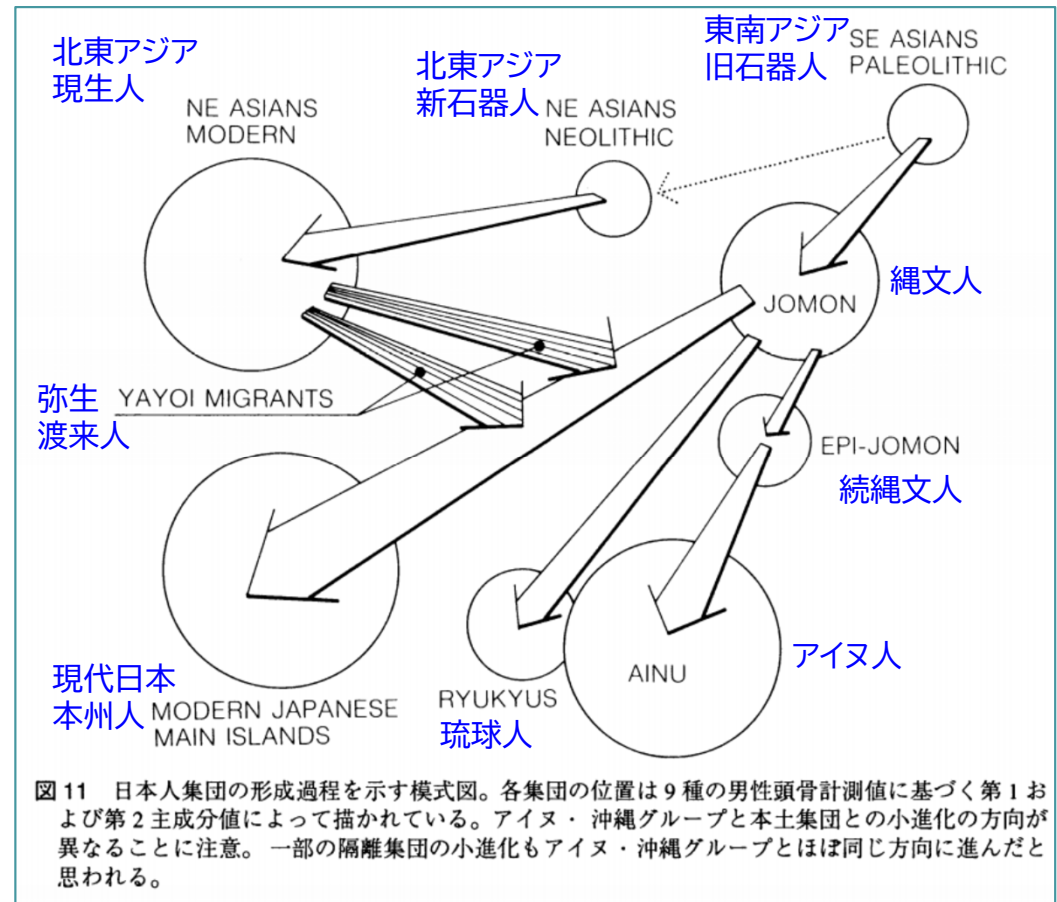
- Hanihara, Kazuro (1991) Dual structure model for the population history of the Japanese. Japan Review, 2:1-33.
- 埴原和郎の論文: 二重構造モデルは、英文で発表された。3年後に本人が翻訳した時の表題が上記
 - かつては、日本人は、昔から日本に定住していた純粋な単一民族であるとするものが定説。
 - 現在の定説は、先住していた東南アジア系の縄文人と渡来人(弥生・古墳)の北東アジア系の人たちと交雑し過去2000年間西から東へと交雑拡散していったとの説。
 - 西日本は、渡来人の遺伝的要素が強く、東日本人達には縄文系の特徴が多く残っている。
 - 北海道、沖縄、離島では、混血が進まず縄文系の遺伝子が強く残っている。
 - 我々日本人は、東南アジア系の先住民である縄文人と、渡来人の北東アジア系の人達のミックスで成り立っている。

頭骨から見る 縄文人と渡来系弥生人の比較

縄文人	渡来弥生人
低顔・彫深	高顔・平坦
四角い眼窩	丸い眼窩
突出した眉間	平坦な眉間
そり上がった鼻	低い鼻
寸詰まりの顔	面長の顔
歯が毛抜き状噛合わせ	歯が鋏状噛合わせ
歯が小さくシンプルな形	歯が大きく複雑な形



国立科学博物館
← PR資料より →



現在 有力な日本人起源論 出アフリカから東アジアまで

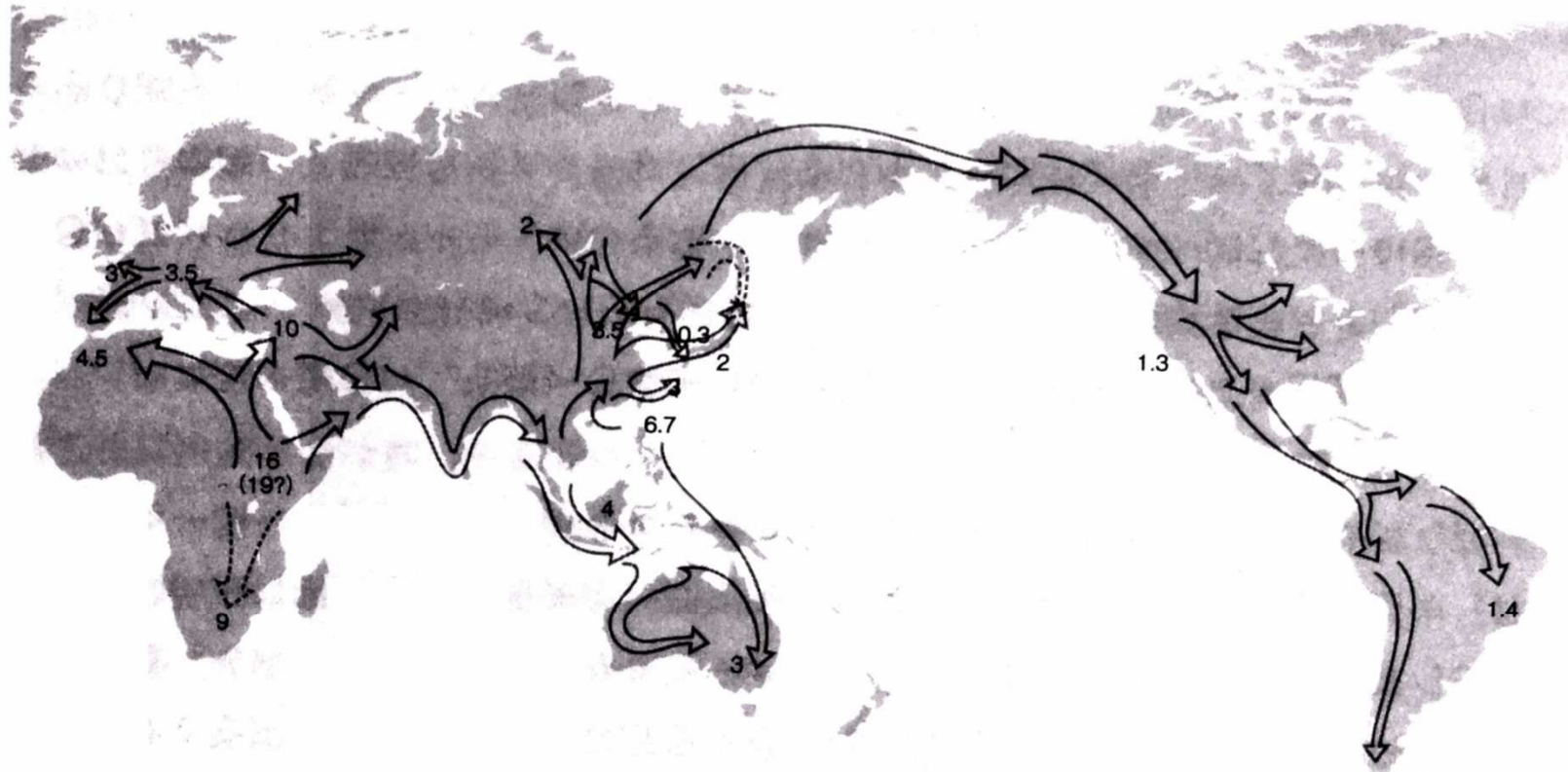


図10 新人(ホモ・サピエンス)の出アフリカと拡散経路推測図
(数字：その地域における最古の新人化石の年代[万年前])

溝口優司著「アフリカで誕生した人類が日本人になるまで より

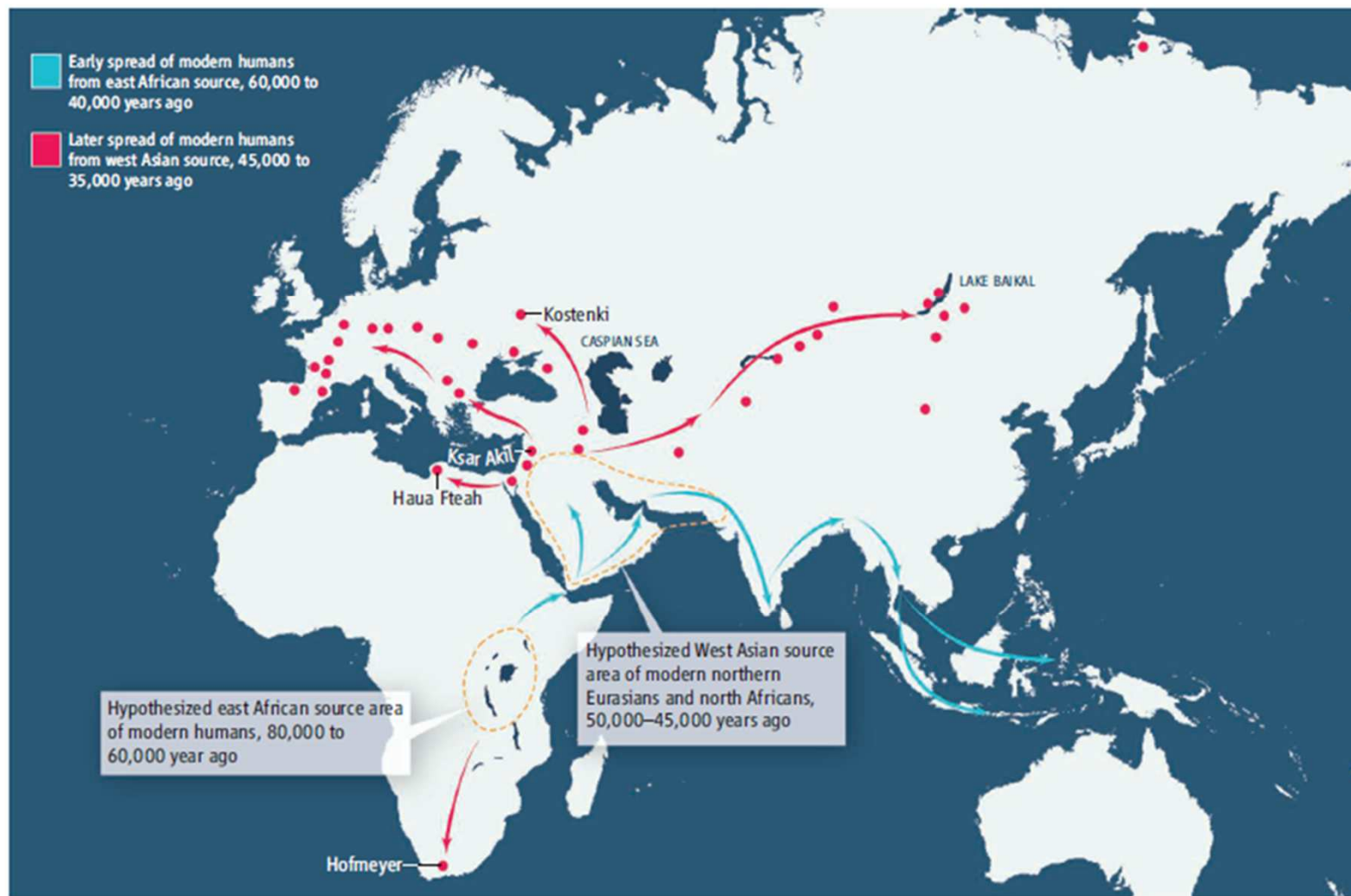
- 上記の溝口優司(国立科学博物館)の示した図でも、出アフリカから日本に至るルートは、不明で、複数の可能性を示している。
- 出アフリカの直後に、ヒマラヤ北ルートを通り、バイカル湖付近を經由して、日本に至ったとする説もある。
- 島国日本への上陸も、北方から、朝鮮半島から、台湾から、フィリピン(スンダ大陸)から等がある。
- 日本へのルートは、現状では、納得の行く案は出ていない。

最新の『新人(ホモサピエンス)アジアへの伝播ルート』

<http://www.jojikanehira.com/archives/15437421.html>

- 東アジアの人々の本質、アフリカから東アジアに至る二つの道 2020年5月13日 「日本語の意外な歴史」

Goebel氏は
Goebel
2007
右図を
示した。



- 中東からヨーロッパに向かうルートと、 → 4.5～4万年前
- 中東から南アジア、東南アジア、パプアニューギニア・オーストラリアに向かうルートが → 6万～4万年前
圧倒的な注目を集め、すっかりその陰に隠れてきましたが、
- 中東→中央アジア→バイカル湖周辺というルートがあることに注目してください。

日本列島への渡来ルート



- 日本への渡来ルートは、複数のルートが論議されている。
- 左図は国立科学博物館 海部陽介氏の示すルート
 1. 台湾 → 沖縄ルート
 2. 朝鮮半島 → 日本列島ルート
 3. シベリヤ・サハリン・北海道ルート
- その他のルート
 - スンダ大陸→沖縄・日本列島直行ルート
- 古代人に帆は作れたのか？
 - 北海道ルート以外は、海洋を越えるルートとなる。
 - 手漕ぎボートで可能か
 - 帆船の可能性？

歴史年代で明確に判っている日本への渡来民

➤ 日本人の起源は、大きく見て、先住民:縄文人とその後の弥生渡来民の二つが考えられる。

✓ このレポートでは、前半は主に、先住民:縄文人について取り扱い、後半で弥生渡来民について記す。

➤ 留意すべきことは、歴史年代に明確に判っている渡来民がある。

✓ DNA解析では、現在生存している人や近世の人DNAから類推することもあるので、注意が必要。

✓ 判明している歴史年代の渡来民を掲げておく。

① オホーツク人(5-13世紀)

② 本州の影響を受けた

アイヌ人が北海道へ (7世紀~) (擦文人・二風谷文化)

③ 帰化人

・ 白村江(663年)での敗戦以降

④ 日韓併合後の半島人

・ 1944年~1945年

・ 日本人:7193万人

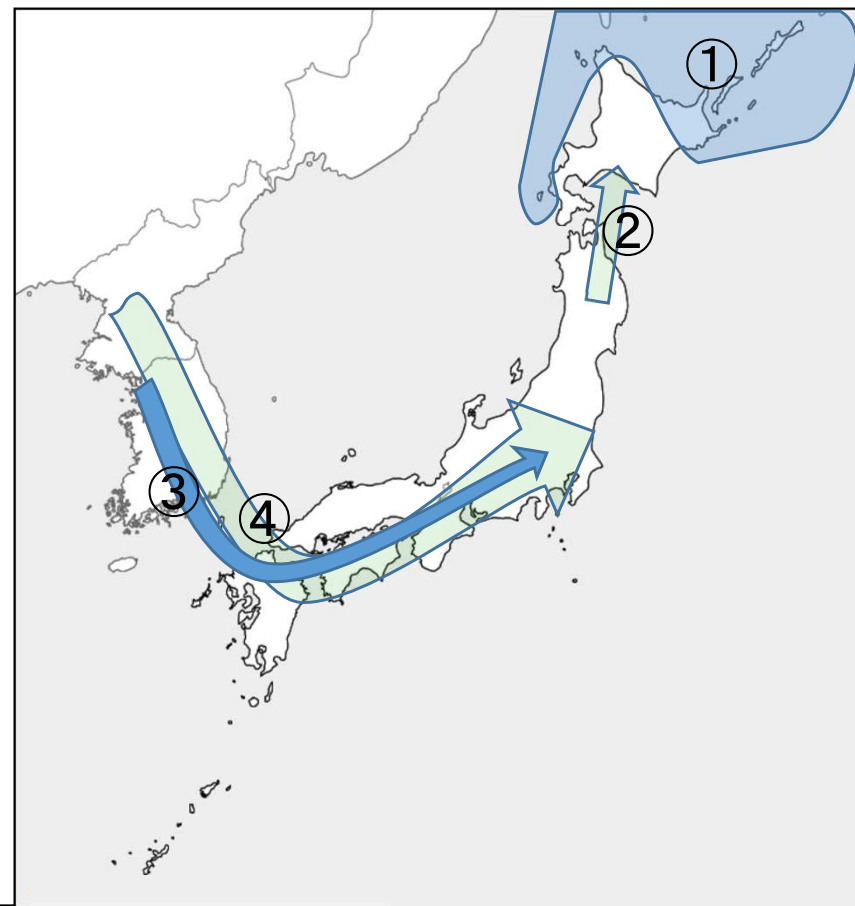
・ 半島人: 195万人(3%)

・ 1960年

・ 日本人:8412万人

・ 半島人: 55万人(1%)

(2%:半島への帰還又は日本への帰化)

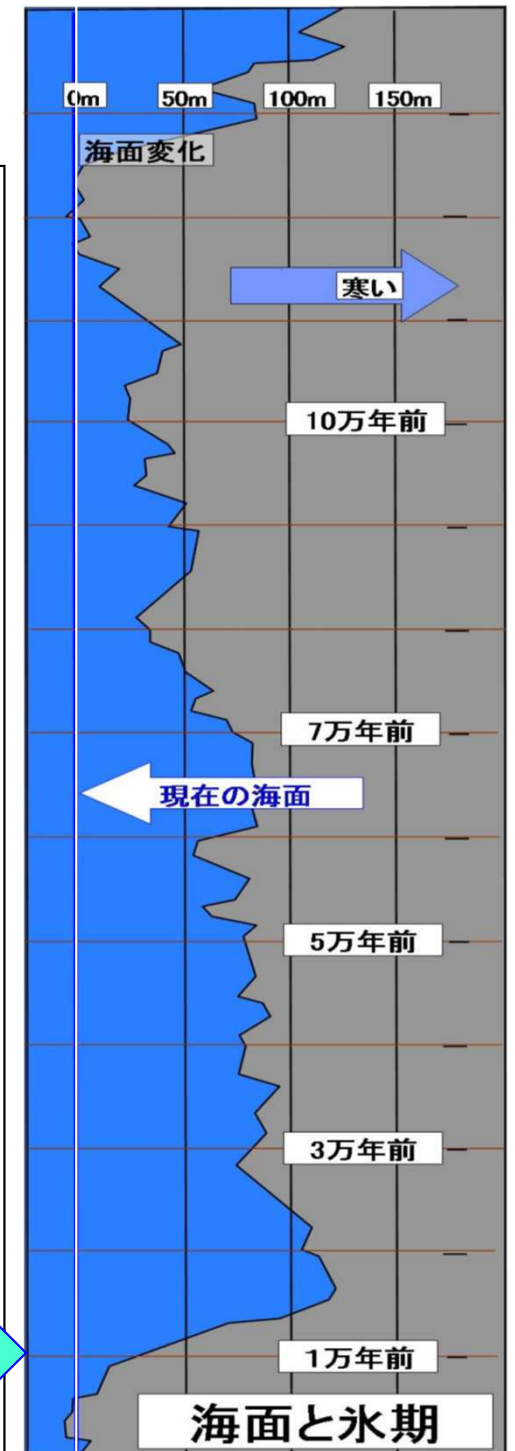


気候と海面の高さの変化を考慮すると、
現在の地図と違う常識が現れる。

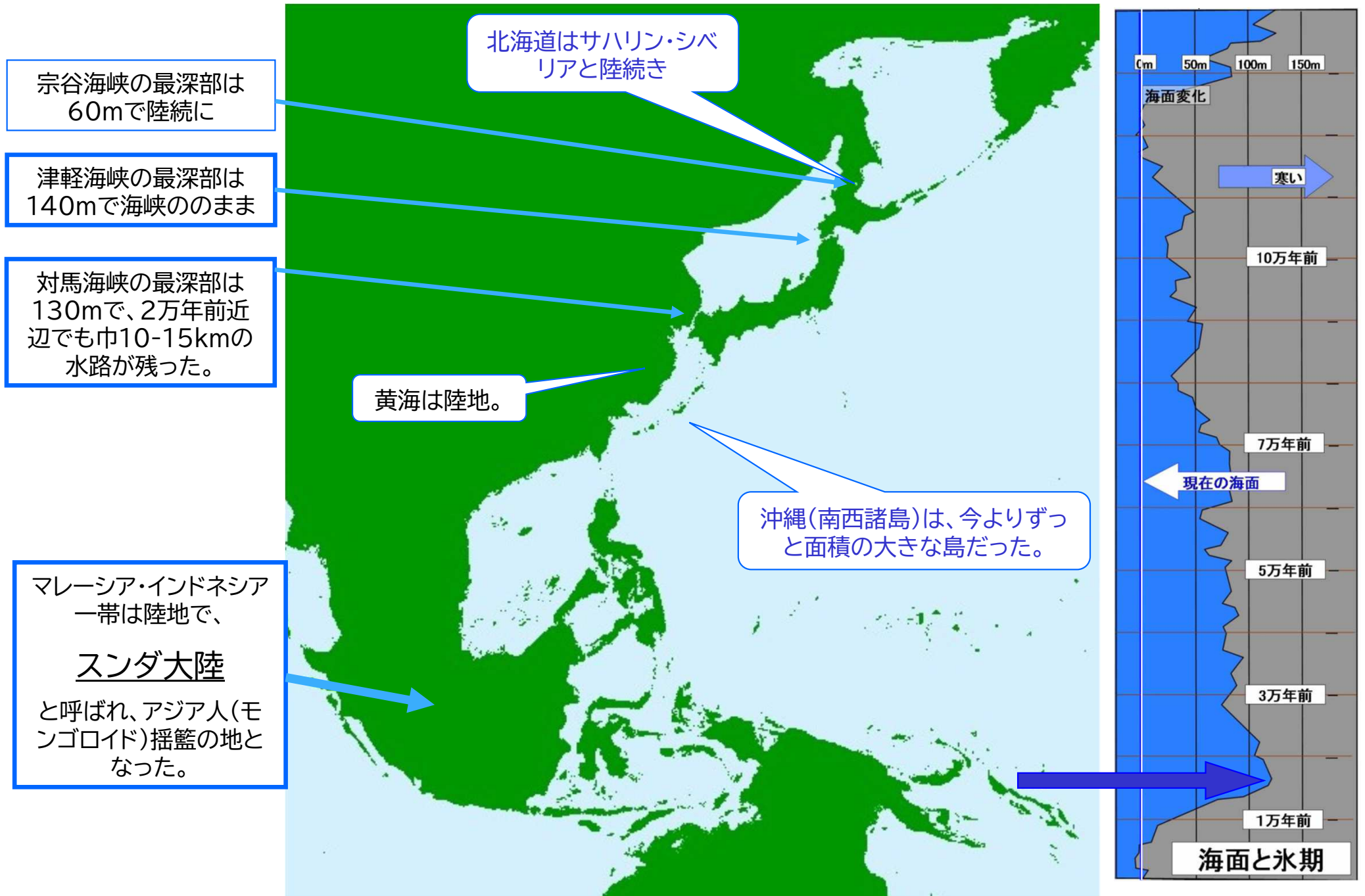
- 黄海は陸地。
 - 安定した食料確保の面から、海沿いの移動は有利。
 - 海岸沿いに移動すると、沖縄・西南諸島は、現在よりずっと近い距離にある。
- 沖縄(南西諸島)は、今よりずっと面積の大きな島だった。
 - 現在の島嶼部分は山で、その周辺に広い陸地が広がっていた。
 - 食物確保など人口包容力は大きかった。
 - 海岸近くの住居・墓地は、海面上昇後には、海面下に。
- 対馬海峡の最深部は130mで、2万年前の最寒期でも巾10-15kmの水路が残った。
 - 対馬海峡の横断には船舶の技術が不可欠。
 - 2万年前の最寒期に、対馬海峡を越えた動物の移動は無かった。
- 津軽海峡の最深部は140mで海峡のまま。
 - 津軽海峡は、冷たい北の海で、渡海は更に困難な場所だった
- 宗谷海峡の最深部は60mで陸続に。サハリン・シベリアとは陸続きだった。
 - 一度、津軽海峡を越えることができた民族にとっては、北海道から樺太(サハリン)、陸続きのシベリヤ沿海部までは、一体の地域だった。

右の図は、東京大学出版社、「モンゴロイドの地球」[3]日本人のなりたち、百々幸雄編中に記載された図「14万年以降の海面変化と宗谷海峡が成立していた時期」この原図は『小野有五、五十嵐八枝子(1991)「北海道の自然史-氷期の森林を旅する」』この図を丸地が、縦横変換し作成したもの。

海水の総量から海面高さを推定したもので、海の形状(海底の上下変動)を加味していない図であることから、現実の海面の高さは若干異なる可能性がある。



新人類がアフリカを出発し、全世界に広まった10万年前から1万年前の時期のことを考える時は、**気候と海面の高さ**を考慮。**最寒期**120m海面が下がった時代の推定図

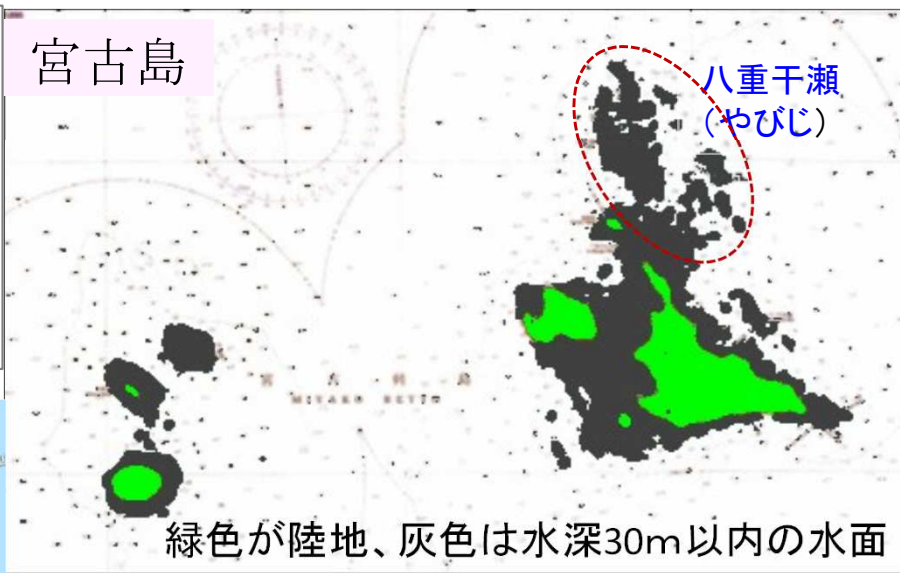


4万年前

海面が80-100m下がった 時代の日本付近の地図 : 沖縄の島々は大きい



宮古島



緑色が陸地、灰色は水深30m以内の水面

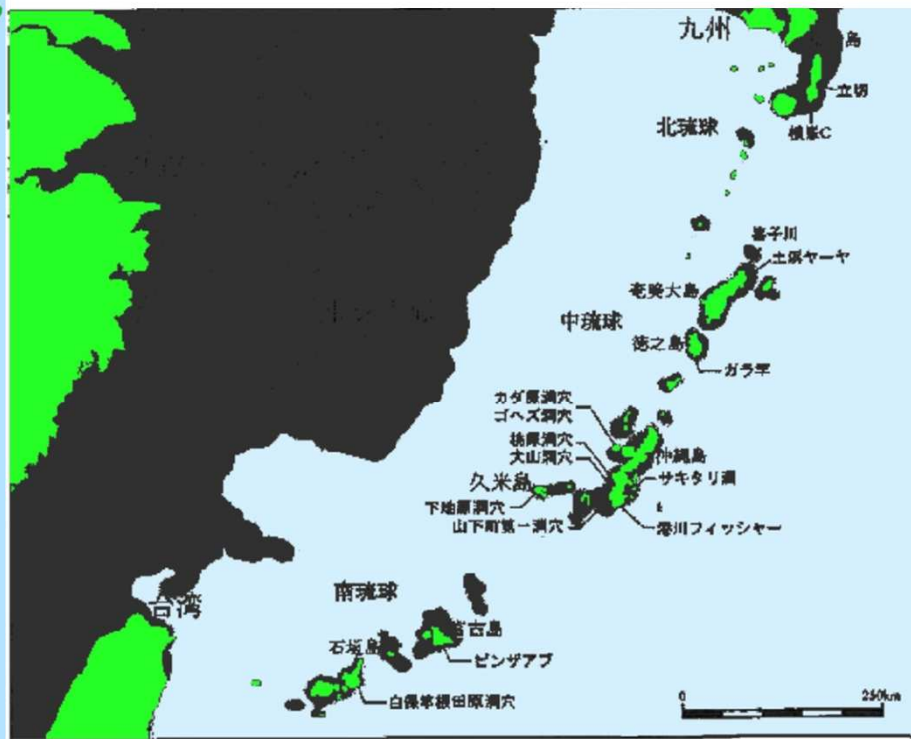


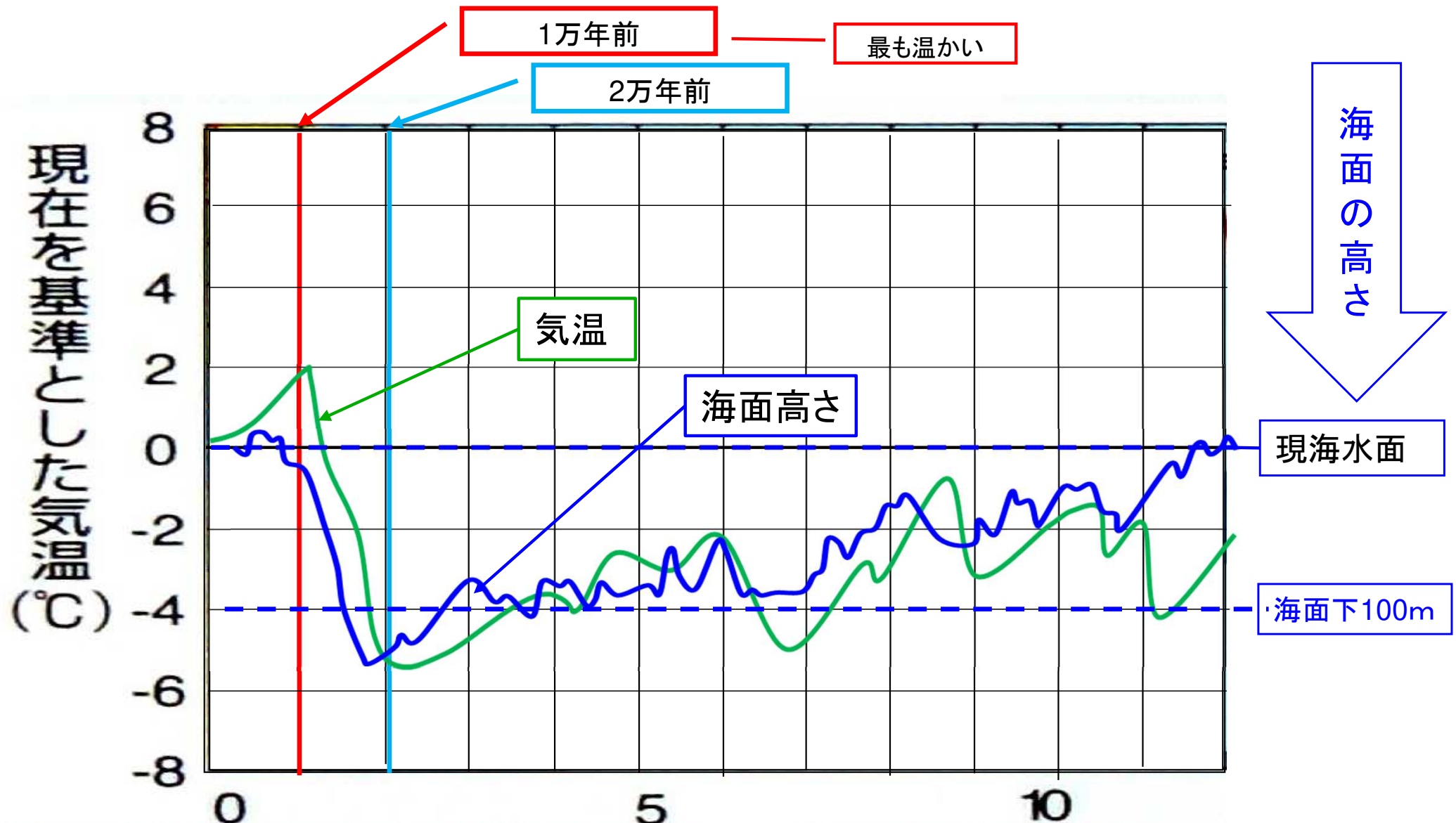
図1 旧石器時代の琉球列島と遺跡

は最終氷期最盛期(約2万年前)の陸地



海面と氷期

海面高さと気温の推移には、ギャップがある



第一期ドームふし計画で 国立極地研
掘削した2503mの氷床コア解析 研究所提供

実際の縄文海進：海水準の最高は、見直され、2.5m程度で、ピークは約7000年前

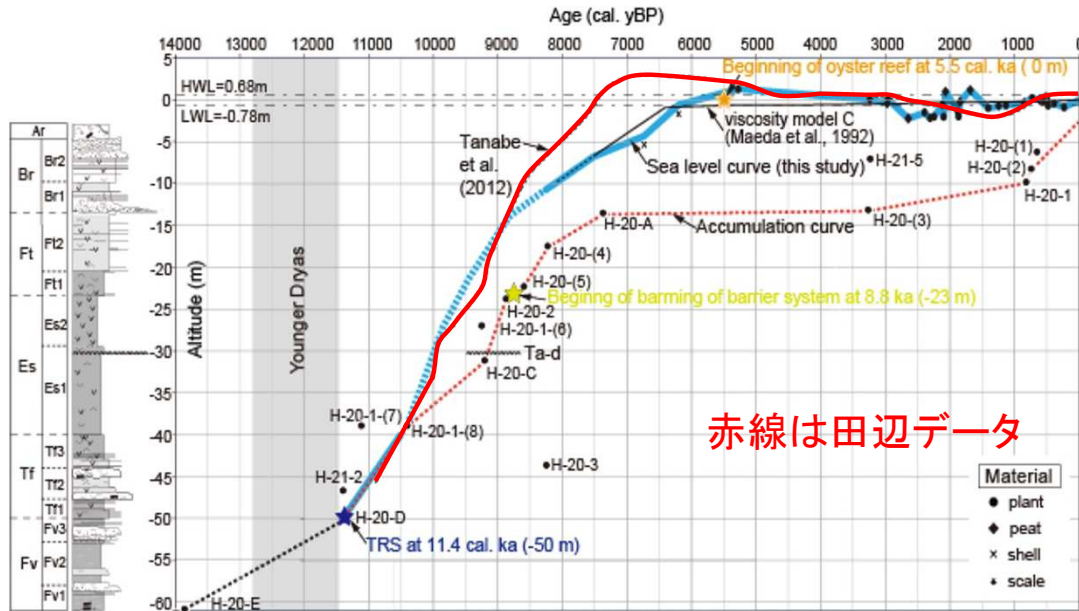
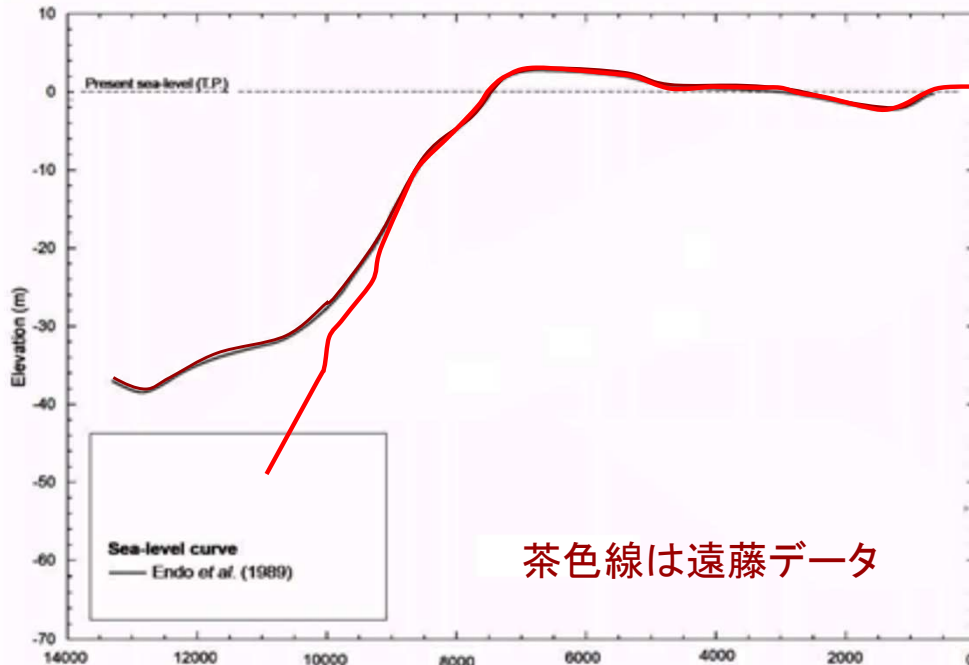


図5. 岸沿岸低地の後氷期バリアーシステムにおける堆積速度曲線と海面変動曲線

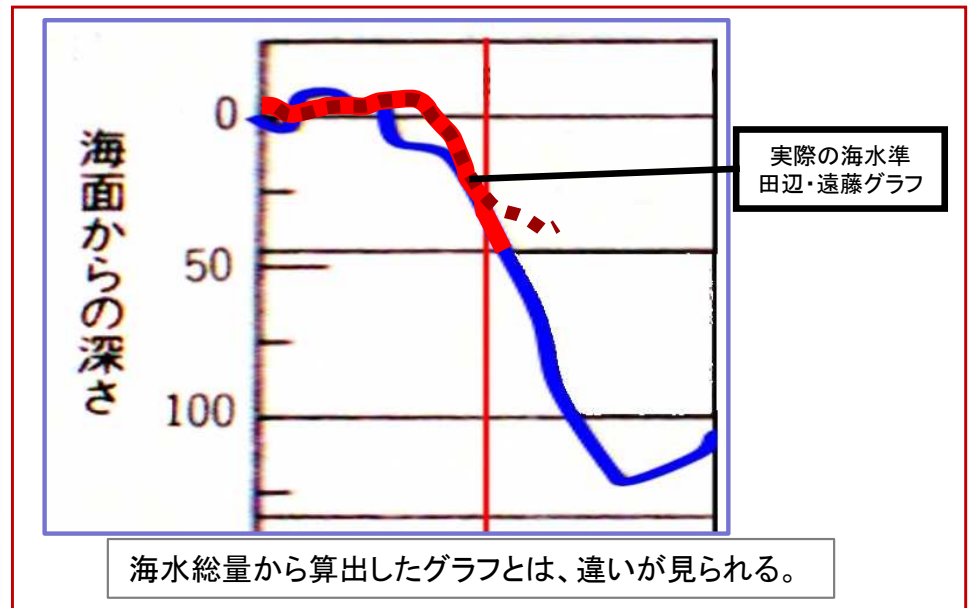
- ・ 遠藤(1989年発表)と田辺(2012年)発表論文のデータが、近年信頼されている。
- ・ 複数地点のデータを集積し、地殻の上昇・下降、土砂の堆積等を詳細に検討し、海水準を見直した。
- ・ 従来の5-6m以上との概念は違っていた。

←

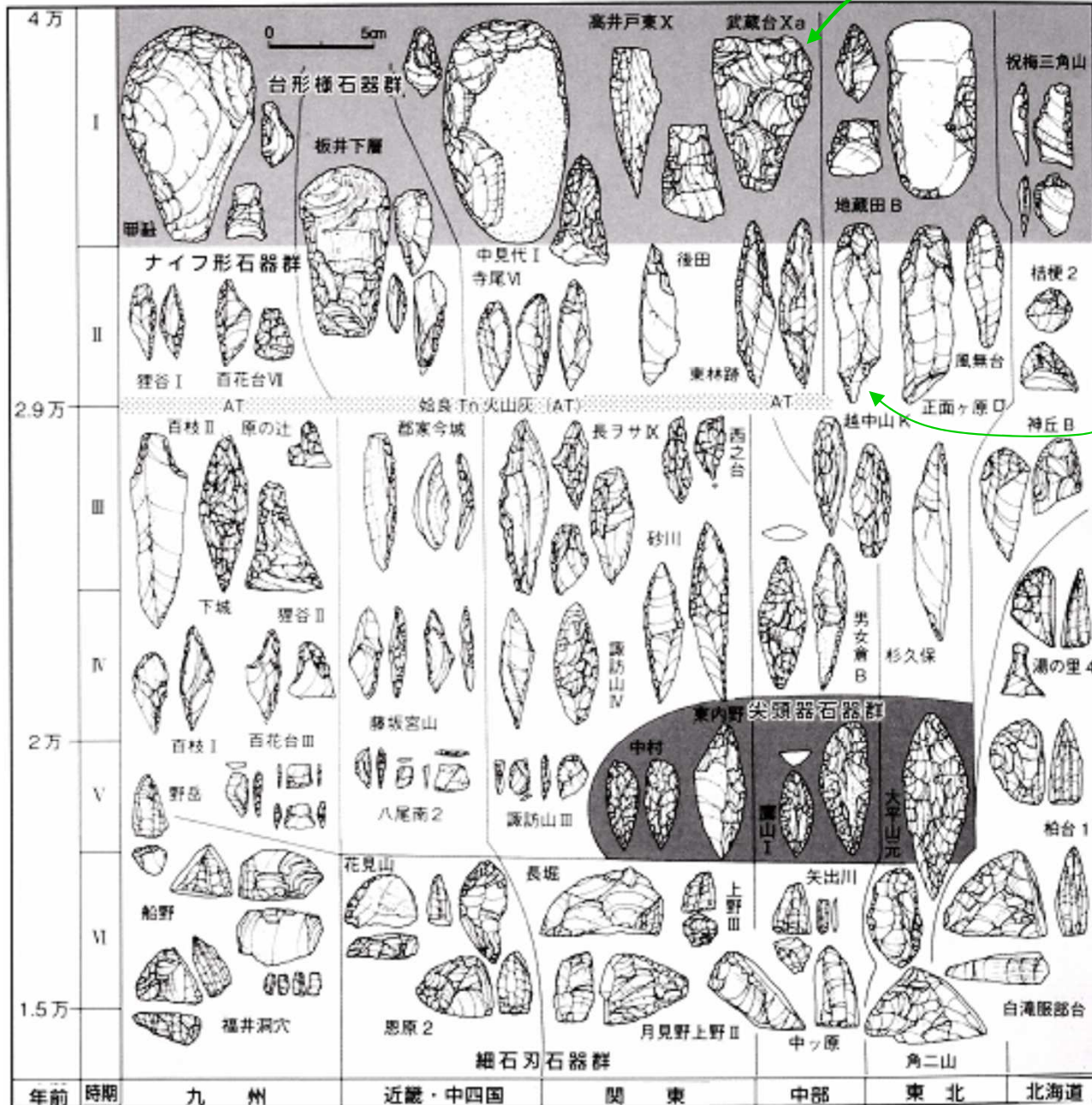
北海道東部厚岸沿岸低地の完新世バリアーシステムと海水準変動の復元
重野 聖之(茨城大学大学院理工学研究科) 平成25年度



←東京低地と中川低地における沖積層のシーケンス層序と古地理
田辺 晋1・中西利典2・石原与四郎3・宮地良典1・中島 礼1, 2014
(左右反転の加工をしています)



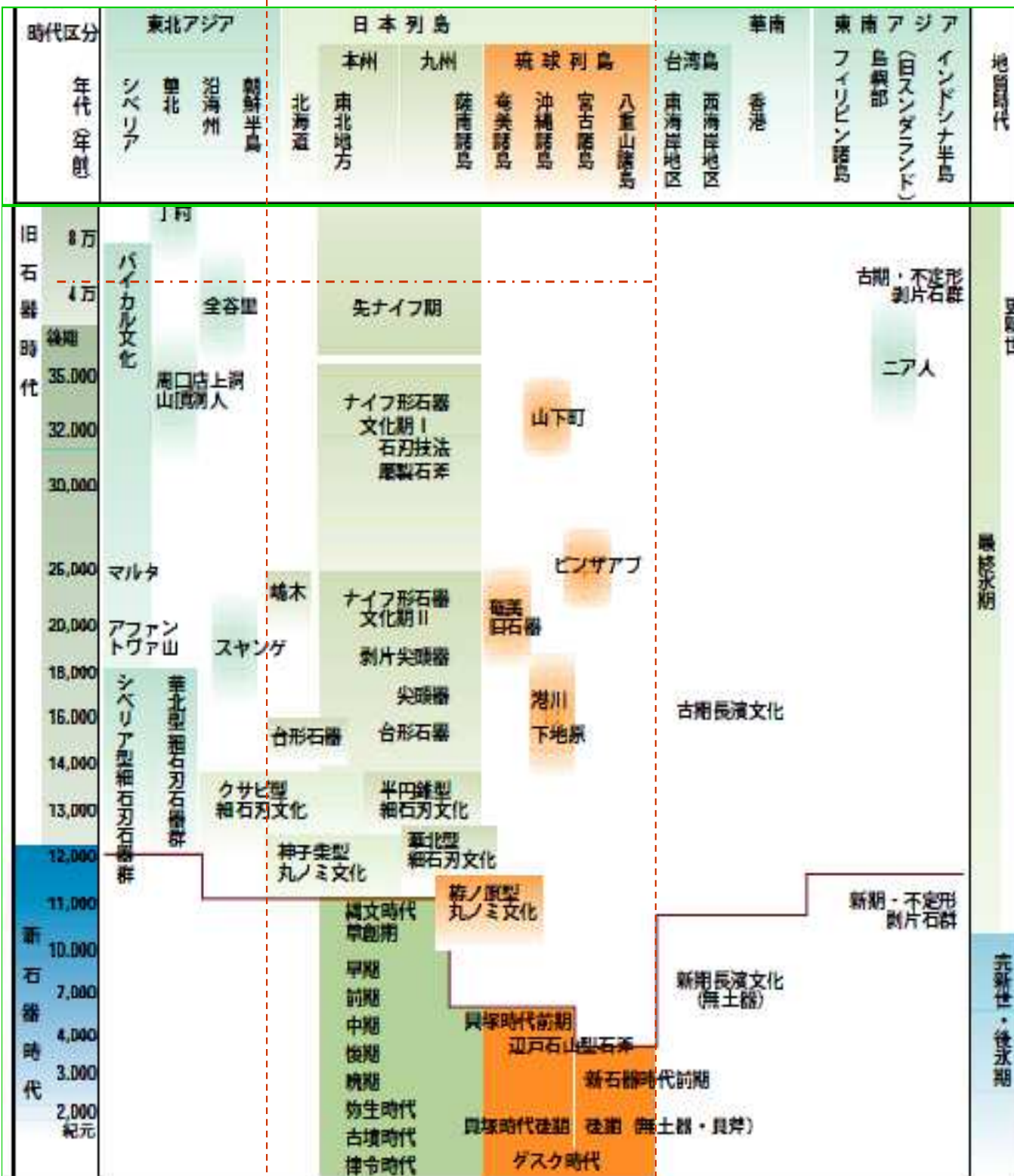
日本の旧石器は、4万年前から日本全土に展開し、継続する



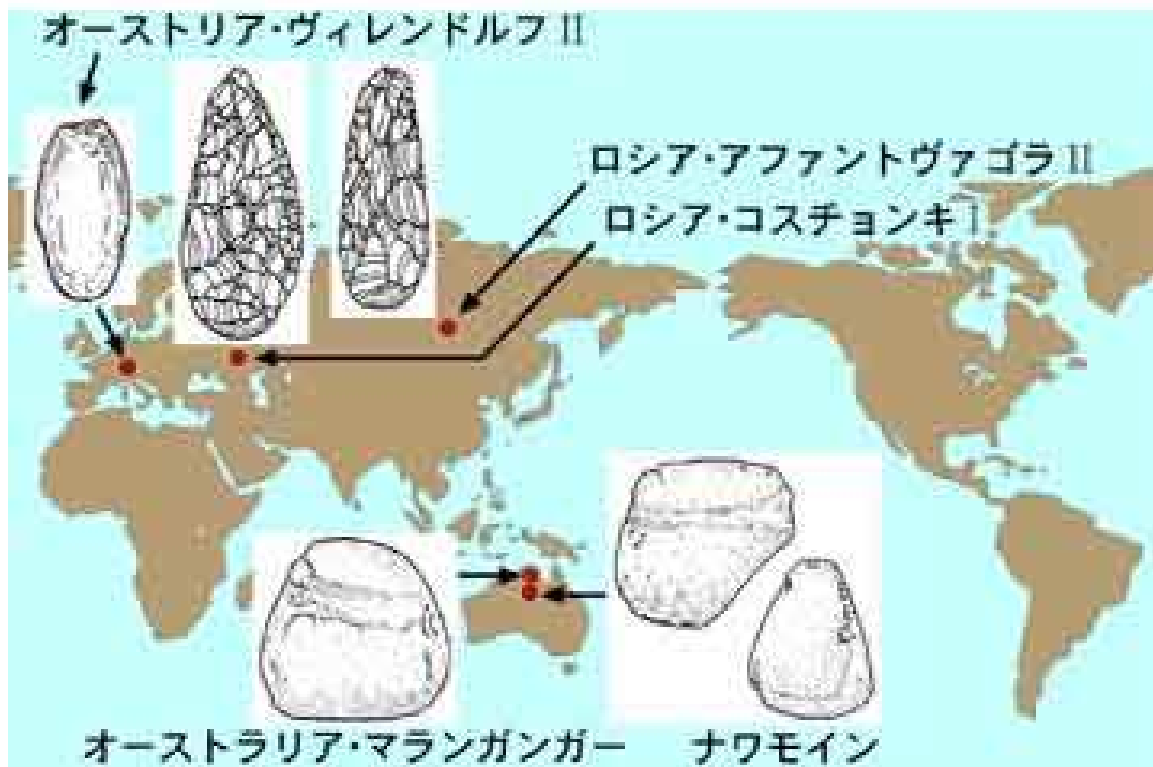
- 堤 隆著「列島の考古学-旧石器時代」河出書房より
(表は上下を反転)
- 九州から北海道まで、4万年前からの石器が残されている。
- 細石刃石器が登場する前に、各地で、石器が進化していたことが判る。



考古学・石器から判ること



- 4万年以降、寒冷化が進み、生活環境が厳しくなる中で、連綿と、石器の文化が、日本各地で発展しつづけていたことが判る。
- 日本で発掘された石器で年代測定が行われたもので、最も古いものは3万8千年前のもの。
- バイカル文化が発展している時期には、日本には、既に、旧石器文化は根づいていた。
- シベリア型細石刃が発生する時期には、既に、日本では、石刃技法から進化し、剥片尖頭器石器に進み、石器の文化・技術の蓄積が十分にあった。
- 日本の細石刃石器は、1万2千年頃からで、日本国内の技術的蓄積の上に導入された。(小田静夫氏の言)



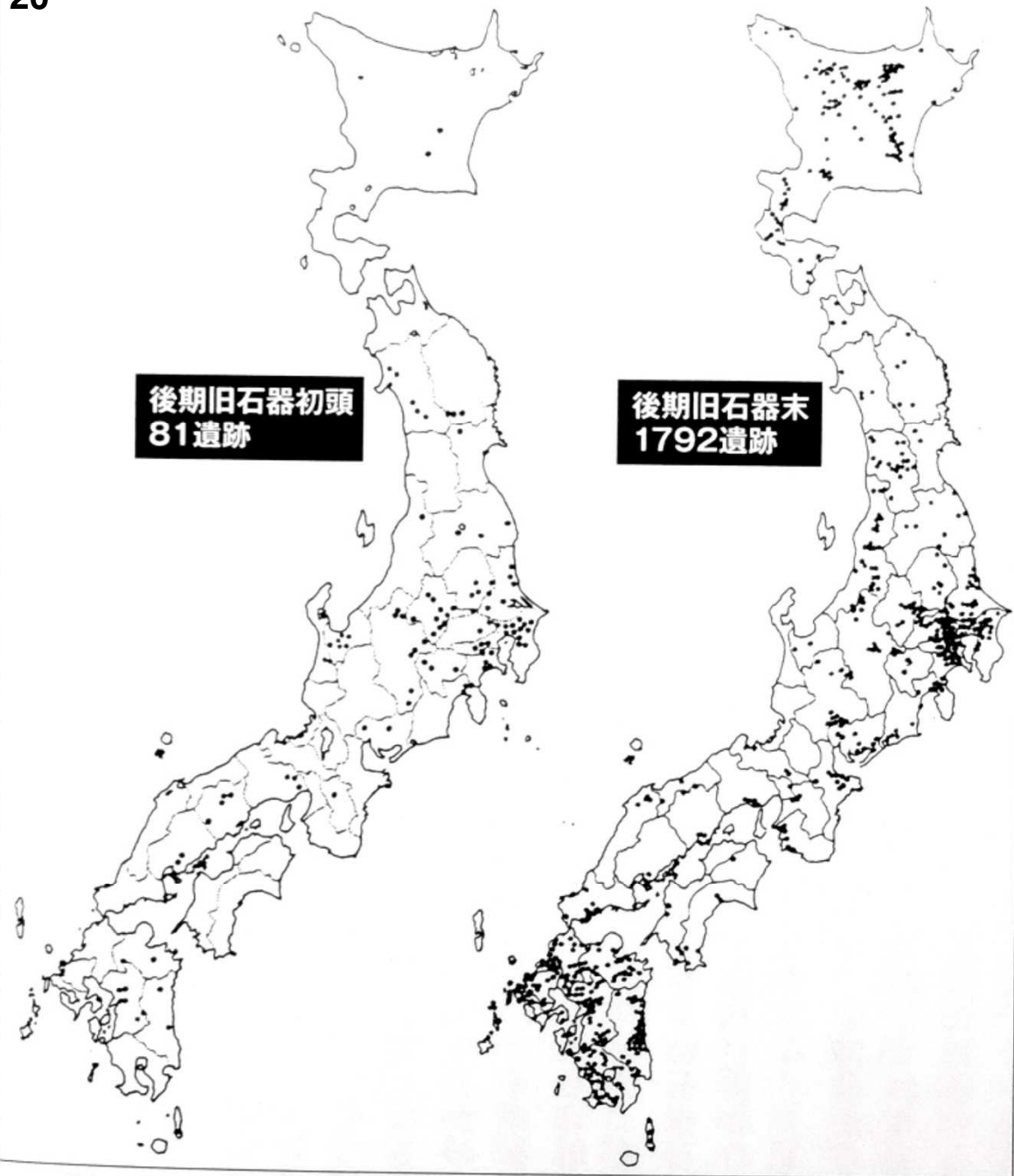
日本以外の地域では、石器は発展していたのか？

磨製石斧 小田静夫のブロボより

- ・ 日本の旧石器文化の磨製石斧は、(中略)つまり現在「世界最古」の磨製石斧であり、さらにこの磨製技術は日本で独自に発明された可能性もある。(小田静夫)

「世界最先端の独自技術が日本にあった。」と云える。

- ・ 世界各地の磨製石斧は、日本以外では、更新世に溯る例は、殆ど知られていない。(更新世=約258万年前から約1万年前までの期間)
- ・ 認定し得る僅かの資料も確証に欠く。
- ・ 例示されている6例中オーストラリアの2例以外は全て2万4千年前より新しい



日本全土への「広がり」

- 4万年前～3万5千年前の5千年間の遺跡数は、81箇所
- その2万年後の2万～1.5万年前の5千年間の遺跡数は、25倍の1792箇所
- シベリア型細石刃石器が、日本に普及(1万4千年前より)する以前に拡大 初頭より、九州から北海道までに、満遍なく、広がっていることに注意。

後期旧石器時代とは

旧石器捏造事件以前には、数十万年前の石器も出土するとのことで、旧石器時代を、前期・後期に分けていた。

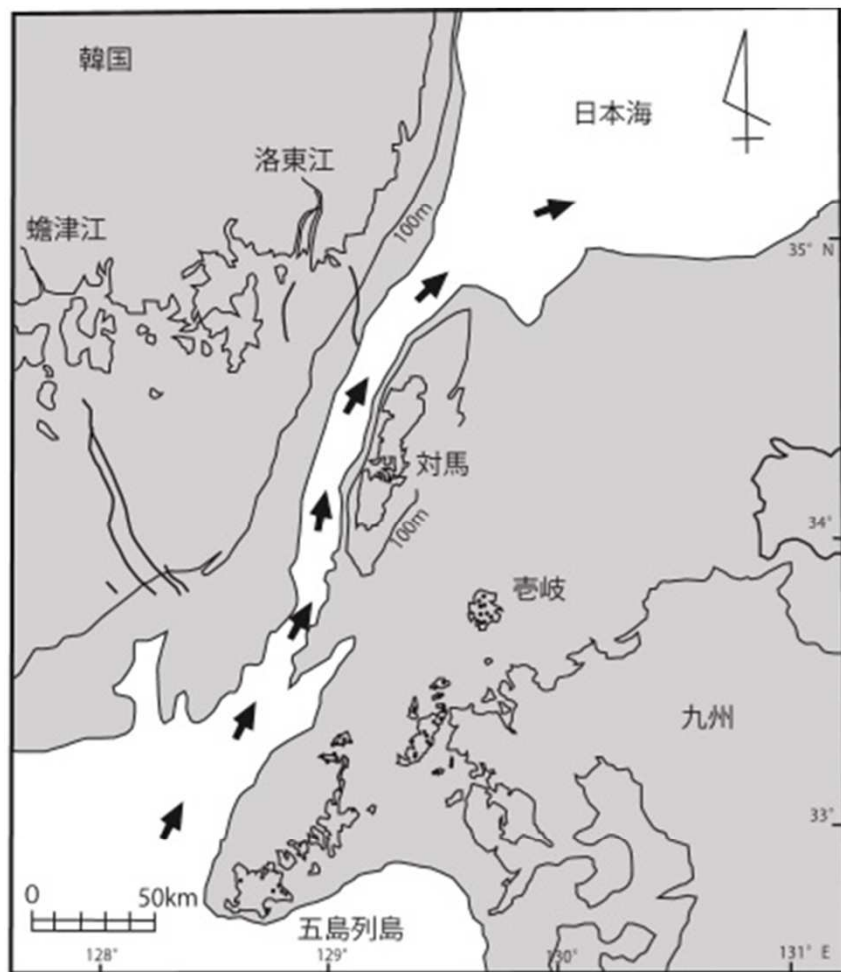
この名残で、4万年前以降の石器(旧石器)を、後期旧石器と云う。

後期旧石器時代の遺跡数と人口動態 日本列島において4万から3.5万年前の環状ブロック群の遺跡は81か所(橋本2005)、2万から1.5万年前の細石刃石器群の遺跡は1792か所(堤2003)が発見されている。後期旧石器時代の2.5万年間で25倍の遺跡数の増加がうかがえ、一定の人口増を物語るデータである。

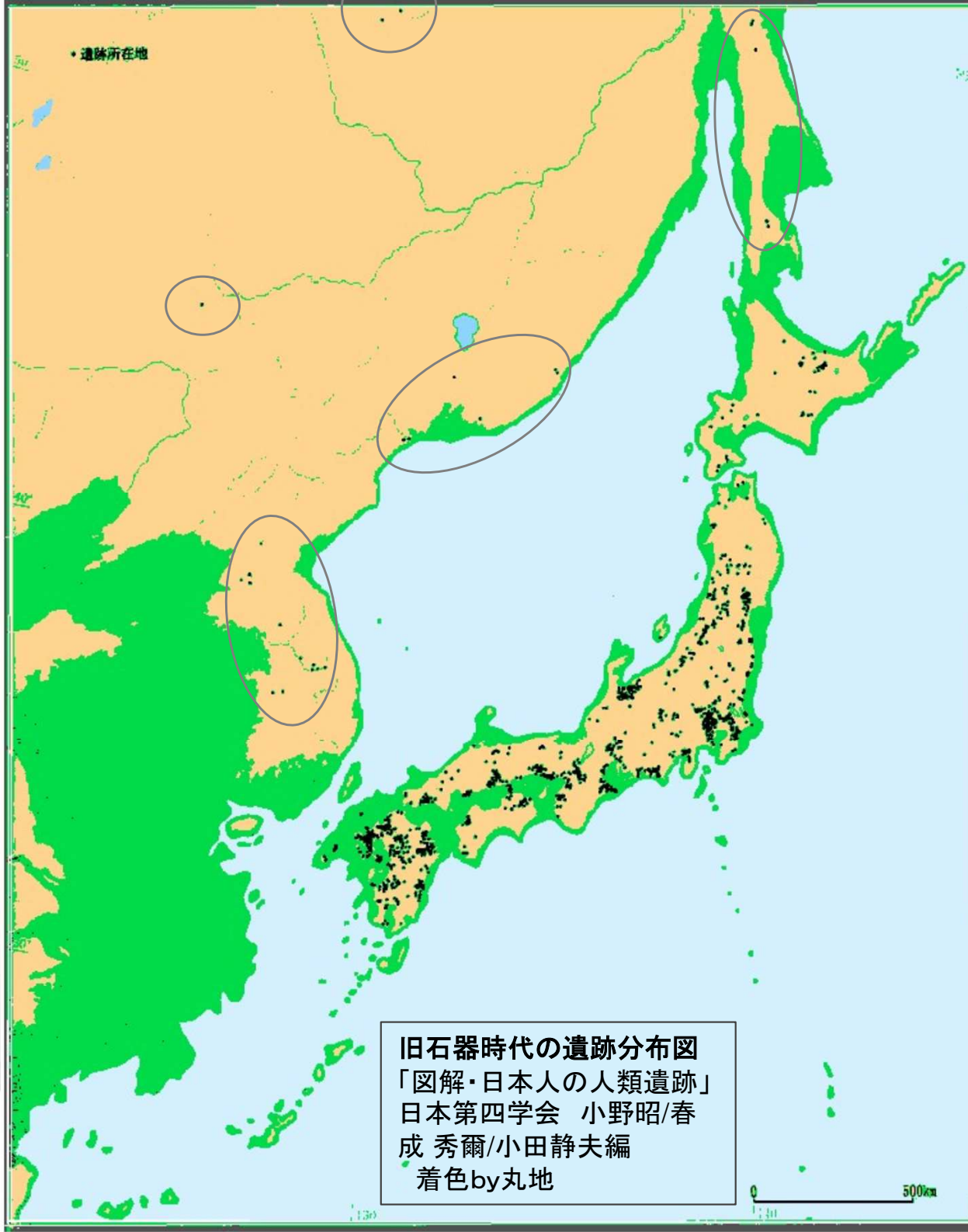
堤 隆著「列島の考古学-旧石器時代」
河出書房 より

旧石器時代の遺跡 分布/密度

氷河期最寒期の 対馬海峡



第5図 LGM期の対馬海峡



旧石器時代の遺跡分布図
「図解・日本人の人類遺跡」
日本第四学会 小野昭/春
成 秀爾/小田静夫編
着色by丸地

留意すべき二つの事項

• 人類の新天地への移動スピード

- アメリカ原住民は、ベーリング海峡を渡ってから凡そ1000年で、南アメリカ南端まで到着したと云われる。その直線距離は凡そ15,000km。地球一周の1/3以上
 - 陸上移動するスピードは速い。
 - 1000年間で、地球一周の1/3
 - 1万年間では、地球3周以上
- 東アジア(スンダ大陸)に人が来てから6万年以上経過。
 - 民族の長距離移動は、何回も、起きている可能性がある。
 - 現在の民族の分布地域がそのまま、古代の分布ではない。

• 海上の移動に関して

- 海上の移動は、困難。しかし、海上移動した実績・事実がある。
 - スンダ大陸 → サフル大陸 80-100kmの海峡を渡海 6万年～5.5万年前
 - 日本:伊豆半島 ⇔ 神津島 約30kmの距離の外洋航海
往復の航海の証拠:黒曜石の石器 3万7500年前
(沼津市:愛鷹山の井出丸山遺跡の発掘調査で判明)
 - 日本:琉球列島 → 鹿児島 梶ノ原遺跡 丸ノミ形石器 1万2000年以上前
- 困難ではあるが、実際に達成された事実がある。
- 海上の道を排除してはいけない。古代人の航海技術に敬意を払う必要がある。

現代

23

ヒト・日本人の起源・解明には

- DNA解析で判るのはいつの情報？
- 21世紀の現在の情報をもって、古代・歴史的なことを解明するのは難しい。
- 何故ならば、出アフリカ以降のことを語るには、6万年の歴史を、現代の情報から推測することになるから。

1万年前

2万年前

3万年前

4万年前

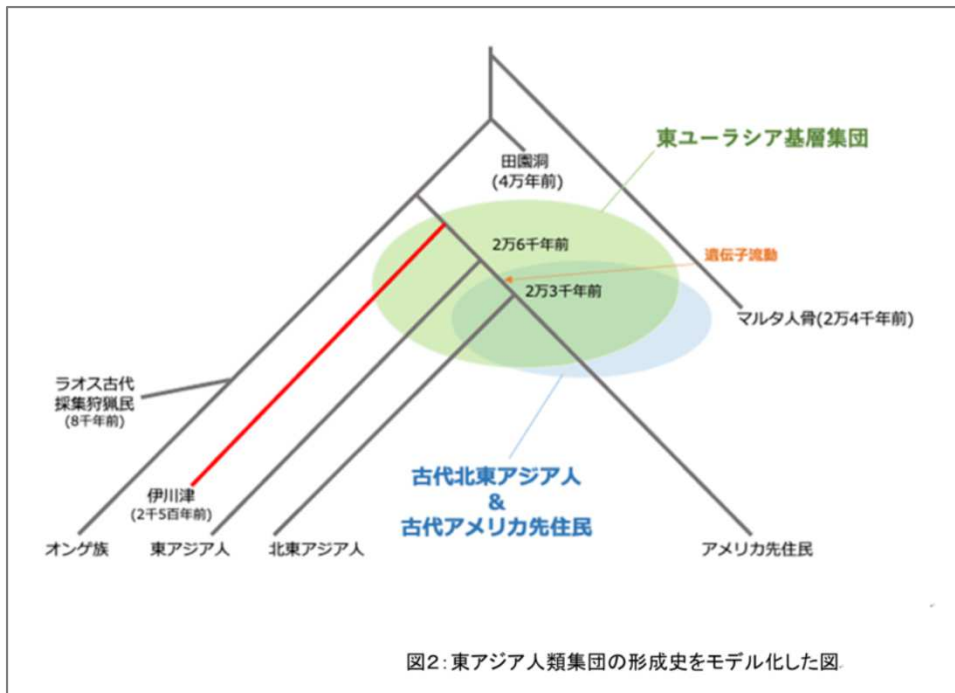
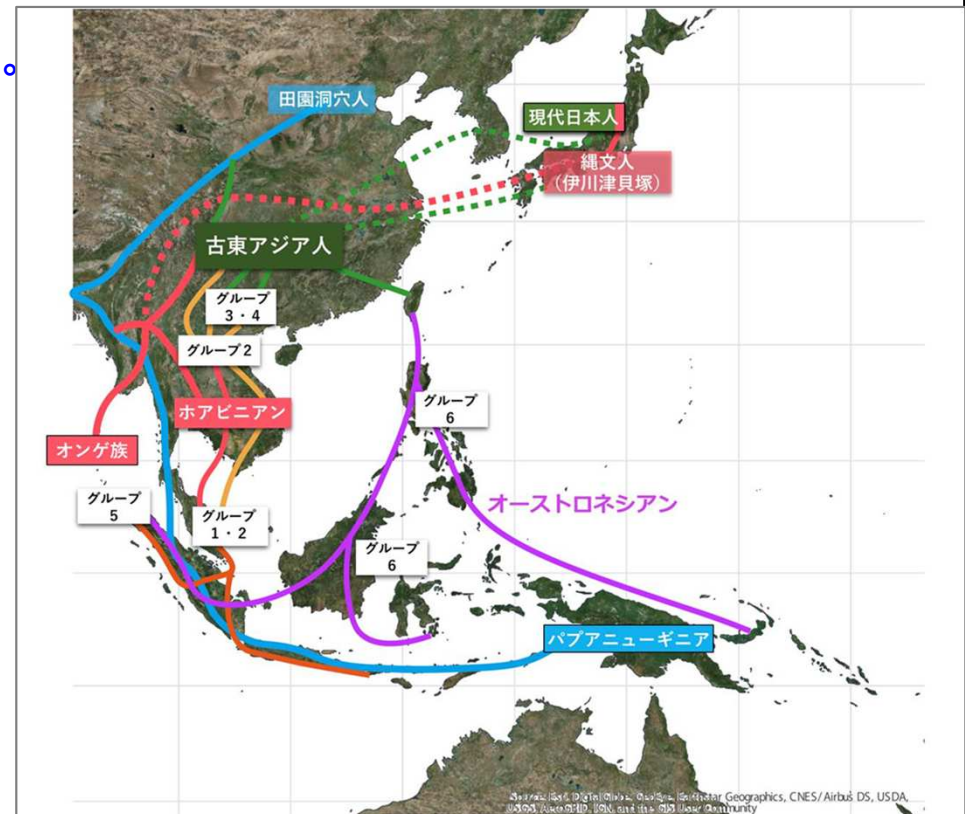
5万年前

6万年前

- 人は活発に移動する。
 - 1万年の間には、人は地球の端から端まで移動できる。
 - 人は争い、一方は繁栄し、他方は消滅又は離散。
 - 天変地異がおきる。
- せめて、3D(平面+時間軸)で考える必要がある。
少なくとも、層(レイヤー)で考えるべき。
歴史学の基本的な方法。
- 一番上の表層を見て、下にある動きのある層を推測する至難さを、どう克服するのか？
 - これが日本人の起源を解明するポイント

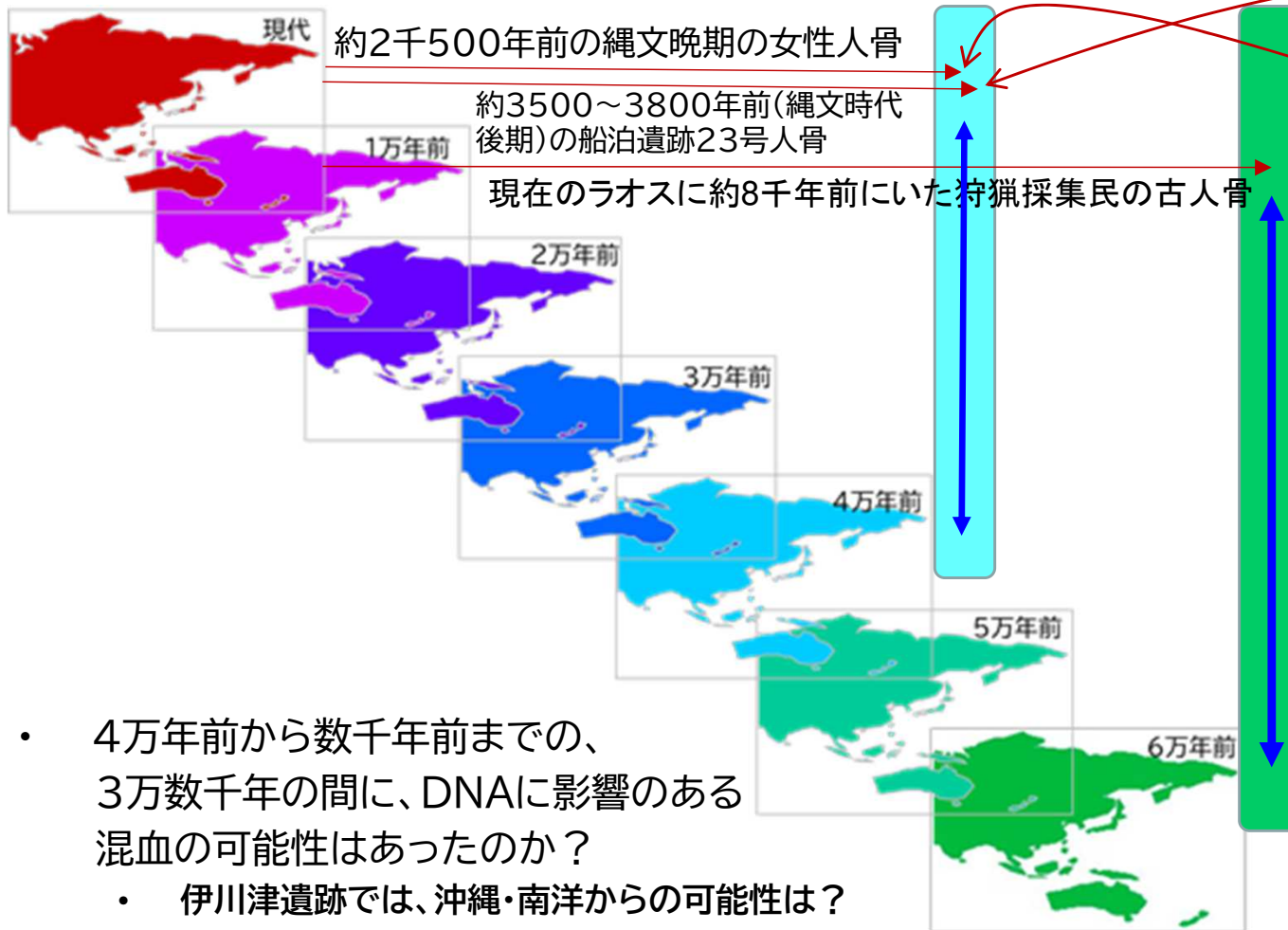
- 伊川津貝塚(注1)遺跡出土の縄文人骨(IK002)の全ゲノム配列を解析し、アフリカ大陸からヒマラヤ山脈以南を通り、ユーラシア大陸東端に到達した最も古い系統の1つであることを明らかにした。
 - アフリカ大陸からユーラシア大陸の東端までのホモ・サピエンスの拡散は、石器など考古遺物はヒマラヤ山脈以北および以南どちらからも見つかるので、**拡散の経路として北と南の2つのルート**があったはずだ。
 - ただし、南北で石器の特徴は異なり、東アジアから北東アジアにかけては、北ルートの特徴をもつ石器が主に見つかる。
 - このため、日本列島にたどりついた最初のホモ・サピエンスは、北ルートを通してやって来たと考えるのが自然だ。
 - ところが、近年劇的に蓄積されている**人類集団ゲノム情報を解析すると、現在ユーラシア大陸の東側に住んでいる人々は、南ルートで来たことを示す。**
 - 考古遺物から考えられてきた人類史とは異なるストーリーであるが、この矛盾はこれまであまり議論されてこなかった。
- 約2千500年前の本州日本に住んでいた女性IK002が、**ラオスで出土した約8千年前の狩猟採集文化を伴う人骨(La368)**と、東南アジア・東アジア各地に現在住む人々の誰よりも、遺伝的に近縁であることを報告した。
- IK002は日本列島にたどりついた最初のホモ・サピエンスの直接の子孫である可能性が高いことが判明した。
- 北ルートでやってきた人々のゲノムの影響は検出されなかった。

図 古人骨ゲノムデータから復元された人の拡散ルート



DNA解析は、いつのデータを調べているのか？

- 太田博樹教授の調べた伊川津縄文人(IK002)は、約2500年前
- 神澤秀樹氏の調べた船泊遺跡縄文人は、3500~3800年前
- このデータを使って、4万年前の人の移動を推定できるのか？
- **北方ルートの影響**:伊川津縄文人は**無し**、船泊縄文人は**有り**との報告。

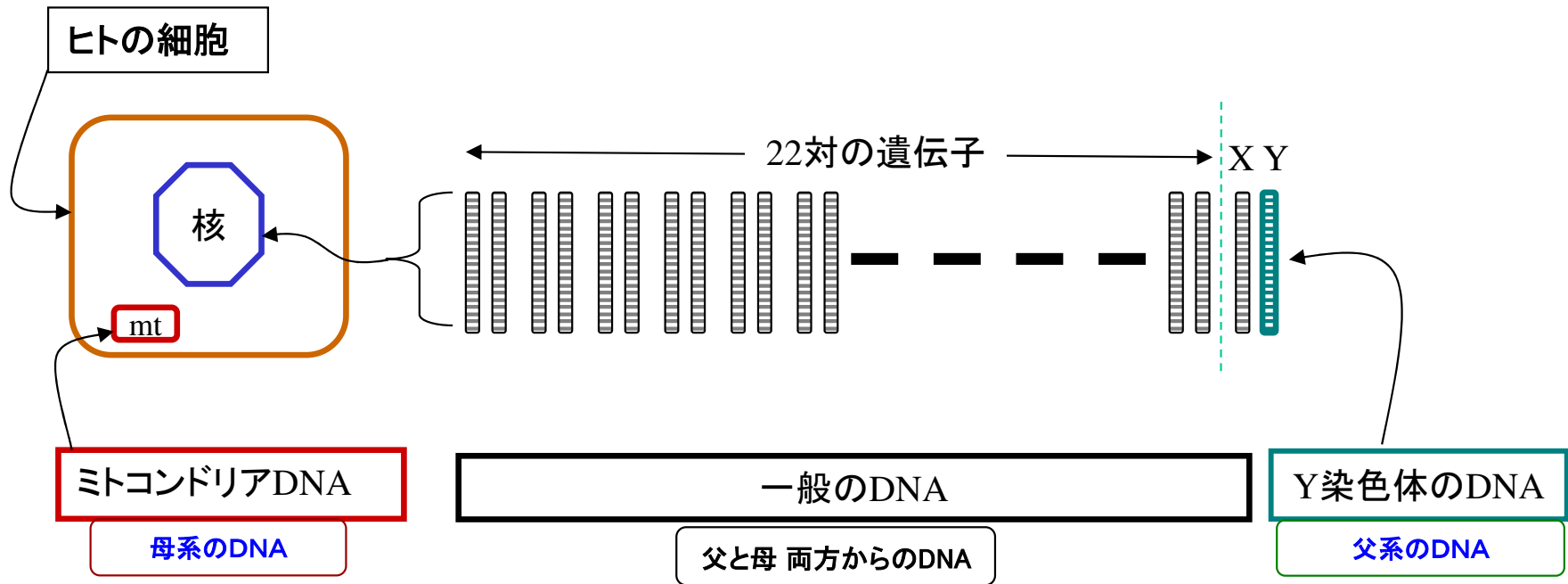


- 4万年前から数千年前までの、3万数千年の間に、DNAに影響のある混血の可能性はあったのか？
 - 伊川津遺跡では、沖縄・南洋からの可能性は？
 - 船泊遺跡では、北方住民との混血の可能性は？
 - 白瀧の黒曜石・石器が、シベリヤ・サハリンに移動。
 - シベリヤ・サハリンの住人との混血の可能性あり。



- ラオスのPha Faen 遺跡で出土した約8千年前の狩猟採集文化民族
 - 遺伝的に近い集団現代のアンダマン諸島のオンゲ族やジャラワ族, マレー半島のジャハイ族
- 4万年前は何処に居たのか？
 - スンダ大陸には、4万年前には、広く、居住していたのか？

- ヒトの起源の調査に有効なDNAには、次の3種類ある。



3種類のDNAとは：

- Y染色体のDNA :「父から男のみに伝わる特殊なDNA」 →父の系統が判る
 - ミトコンドリアDNA(mtDNA) :「母のものだけが伝わる特殊なDNA」 →母の系統が判る
(ミトコンドリアは、細胞内で共生している別組織)
 - 一般のDNA :「父と母のDNA」(遺伝子情報の大多数はこのDNA)
 - 人と民族の形質に最も影響の大きい。
 - 核ゲノム(ゲノム)は、Y染色体を含む全ゲノムの含むDNA
 - 核ゲノムの解析は、極めて多大なデータを処理することになり、統計的手法が必須となる。
 - ☆ その解析結果の評価は、採用した統計的手法や考え方を批判的に評価する必要がある。
- 1種類のDNAだけを捉えて、ヒトの起源を論じても片手落ちで、3種類のDNAから示される全ての事実を整合したものが真実となる。

カギとなる事象と論文：この事実を明瞭に説明できる起源論が望まれる

➤ Y染色体DNA

– 世界中で、ほぼ日本人だけに見られる型のDNAが3系統ある

- D2: アイヌ人の85%、日本人全体の38%
- O2b1: アイヌ人の0%、日本人全体の21%
(ほぼ日本人だけ、ベトナムなどで少数)
(O2b1は以前はY2型と呼ばれていた)
- C1: 沖縄人の4% 日本人全体の2%

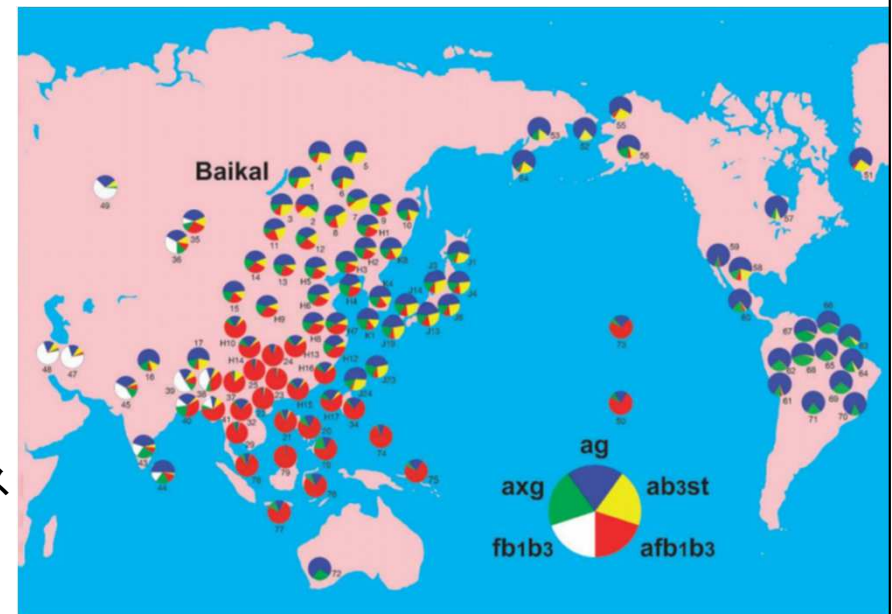
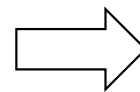
– 日本人の30%(上記の数値とは相違)と韓国人の10%に見つかるY2といわれる型は、その他の地域では発見できないが台湾で65人中8人で見つかった。その8人の内3人は名前を「陳」という。(中堀豊著、Y染色体からみた日本人から)

➤ ミトコンドリアDNA (mtDNA)

- 1 茨城県の中妻遺跡の縄文人のmtDNAがバイカル地域に住んでいるブリアートと同一。(篠田謙一と金井理)
- 2 アメリカのフロリダの7000年前のミイラ化したヒトのmtDNAを解析したところ、日本人5人と共通するタイプ。(モンゴロイドの地球3の第4章から)
- 3 埼玉県浦和で発掘された縄文人の頭骨からmtDNAを解析した処、マレー人とインドネシア人と一致した。(モンゴロイドの地球3の第4章から)

➤ 免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子の分布

- ✓ 一般DNAに相当するDNA遺伝子の一つ
- 世界の130集団についての調査結果
大阪医科大学名誉教授の松本秀雄博士の論文
- 右の図 (オーストラリアのアボリジニがポイント)



➤ ATLウィルス

- 白血病を引き起こすウィルス。
(中公新書「新ウィルス物語」日沼頼夫著)
- 人の遺伝と同じように、子々孫々に伝わって感染してきたウィルス
- 非常に古くから居住し、混血の機会の少なかった人に発生。
沖縄・九州・東北・アイヌ・ニューギニア・南北アメリカで発生。

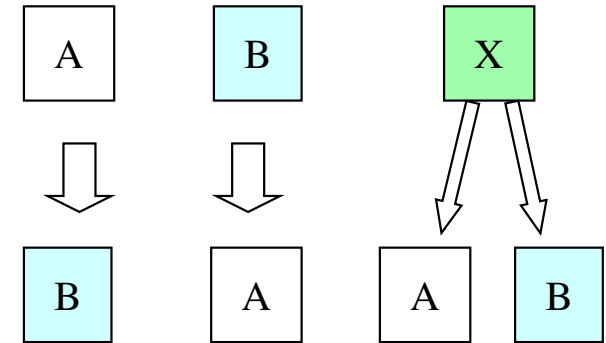
2016年1月20日改訂のISOGGの系統樹による	旧名称	主な地域	系統名称	ハプログループ
ver.11.20 の系統樹に よる	C1	日本列島	C1a1	C-M8
	C3	シベリヤ北部	C2	C-M217
	D1	チベット	D1a	D-Z27276
	D2	日本列島	D1b	D-M55
	O1	中国南部	O1a	O-M119
	O2a	東南アジア	O1b1a1a	O-M95
	O2b	朝鮮半島	O1b2	O-M176 O-L682
	O2b1	日本列島	O-47z	O-M176 O1b2a1-47z
	O3	漢族北方	O2	O-M122
	2016年1月20日改訂のISOGGの系統樹(ver.11.20)による			

同じDNAを発見！ それで何が言えるか？

- DNAの解析から判明した事実から、ヒトの起源について、何が言えるのか？

➤ 地点AとBで同じタイプの遺伝子が見つかった場合

- AからB又は、BからAへと、断定してはいけない。
- 別の地点からAとBへ移動する場合もある。
- 3通りの解の内の正解を見つけるには、別の手掛かりが不可欠。
 - 間違って断定すると、原因と結果が逆になる。
 - 安易に断定しているケースが多々見られ、残念。



➤ あるDNAグループの比率が、地域によって減少・拡大する場合

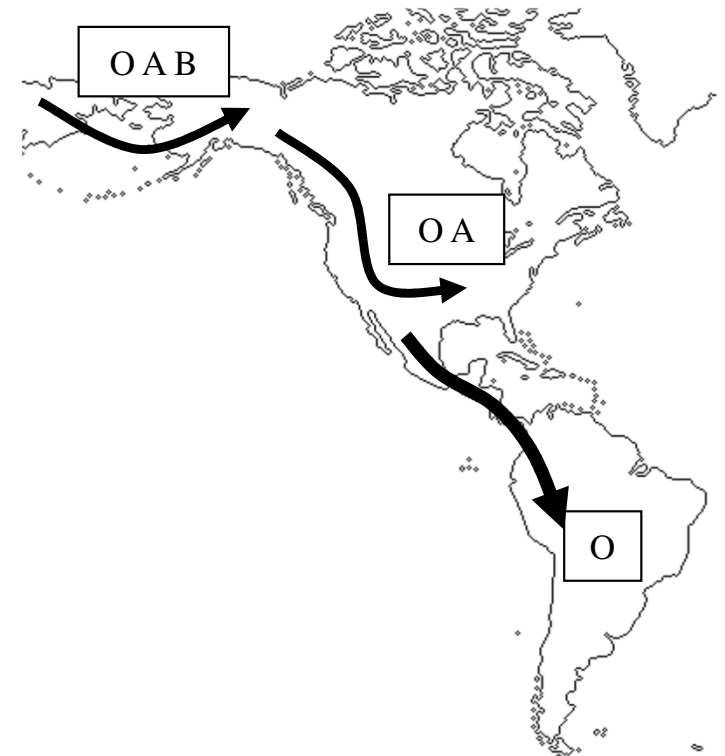
二つの全く反対な傾向が見られるので、安易に断定は出来ない。

* 移動に伴い多様性が失われるケース

- 南北アメリカの原住民の血液型の例・右図
- 中込弥男「ヒトの遺伝」に記載

* 移動に伴い、他民族と混血して行くケース

- 中心が純粋で周辺が混血度合いが大きい



Y染色体DNA-「陳」と言う家系

- 世界の中で、**ほぼ日本人だけに見られる特異なY染色体DNAの型が3系統ある**
 - アイヌ人の85%、日本人全体の38%はD2
 - アイヌ人の0%、日本人全体の21%はO2b1
(O2b1は、以前「Y2型」と呼ばれていた)
 - アイヌ人の0%、日本人全体の5%はC1
- 日本人の30%(上記の数値21%とは相違)と韓国人の10%に見つかる「Y2」といわれる型は、その他の地域では発見できないが台湾で65人中8人で見つかった。その8人の内3人は名前を「陳」という。
- (中込弥男著「ヒトの遺伝」と、論文
A Y-ASSOCIATED ALLELE IS SHARED AMONG A FEW ETHNIC GROUPS OF ASIA 著者中込外より)
 - この「陳」と言う家系は、黄河の南の地域に起源を持つという。
 - 同じY染色体DNAを持つ、歴史を辿れる家族名を持つ「陳」一族と日本人の関係を説明できる起源論が望まれる。**

日本人の主要なY遺伝子は、
日本だけに孤立している！

・Y遺伝子の名称はその後、更に、変更がありました。
最新の名称は下記を参照下さい。

2011年6月20日改訂	旧名称	主な地域	系統名称	ハプログループ	
ver.11.20	C1	日本列島	C1a1	C-M8	
	C3	シベリヤ北部	C2	C-M217	
	D1	チベット	D1a	D-Z27276	
	D2	日本列島	D1b	D-M55	
	O1	中国南部	O1a	O-M119	
	O2a	東南アジア	O1b1a1a	O-M95	
	O2b	朝鮮半島	O1b2	O-M176	O-L682
	O2b1	日本列島	O-47z	O-M176	O1b2a1-47z
	O3	漢族北方	O2	O-M122	

2016年1月20日改訂のISOGGの系統樹(ver.11.20)による

紀元前の神話の時代～4世紀まで河南省にいた。
河北省東部に陳と云う小国
西周時代に存在

Y2(O2b1)の移動ルート

西暦220年
漢の滅亡時に
陳国を逃れ南へ
福建省・広東省へ

18世紀
台湾へ移住

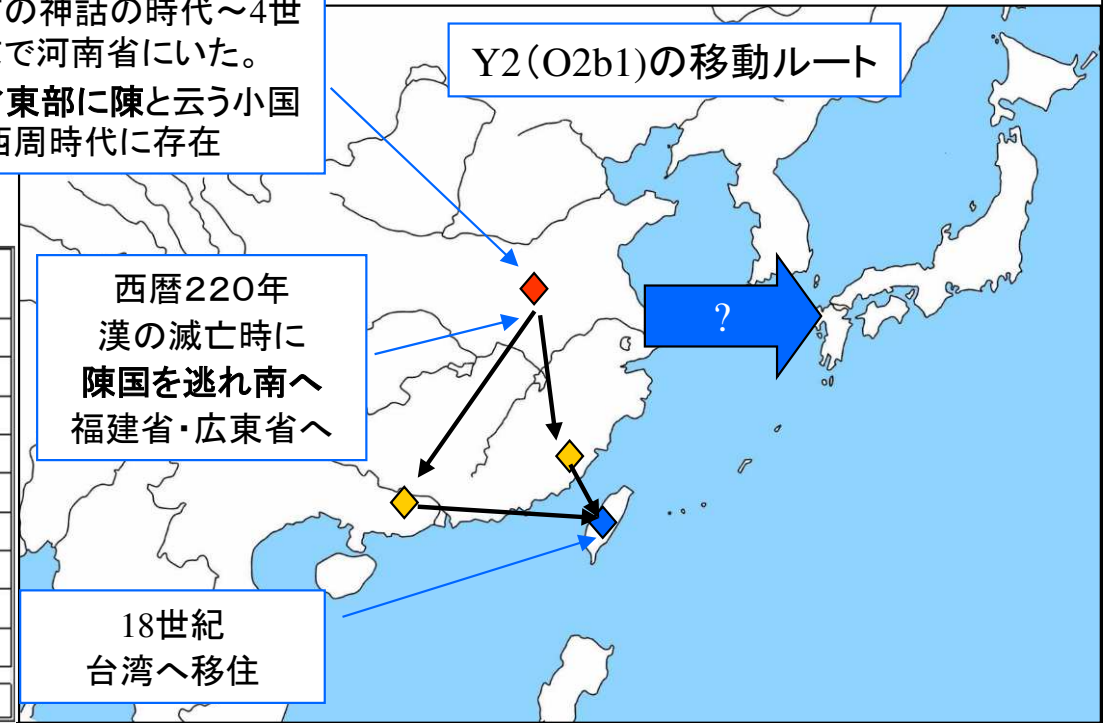
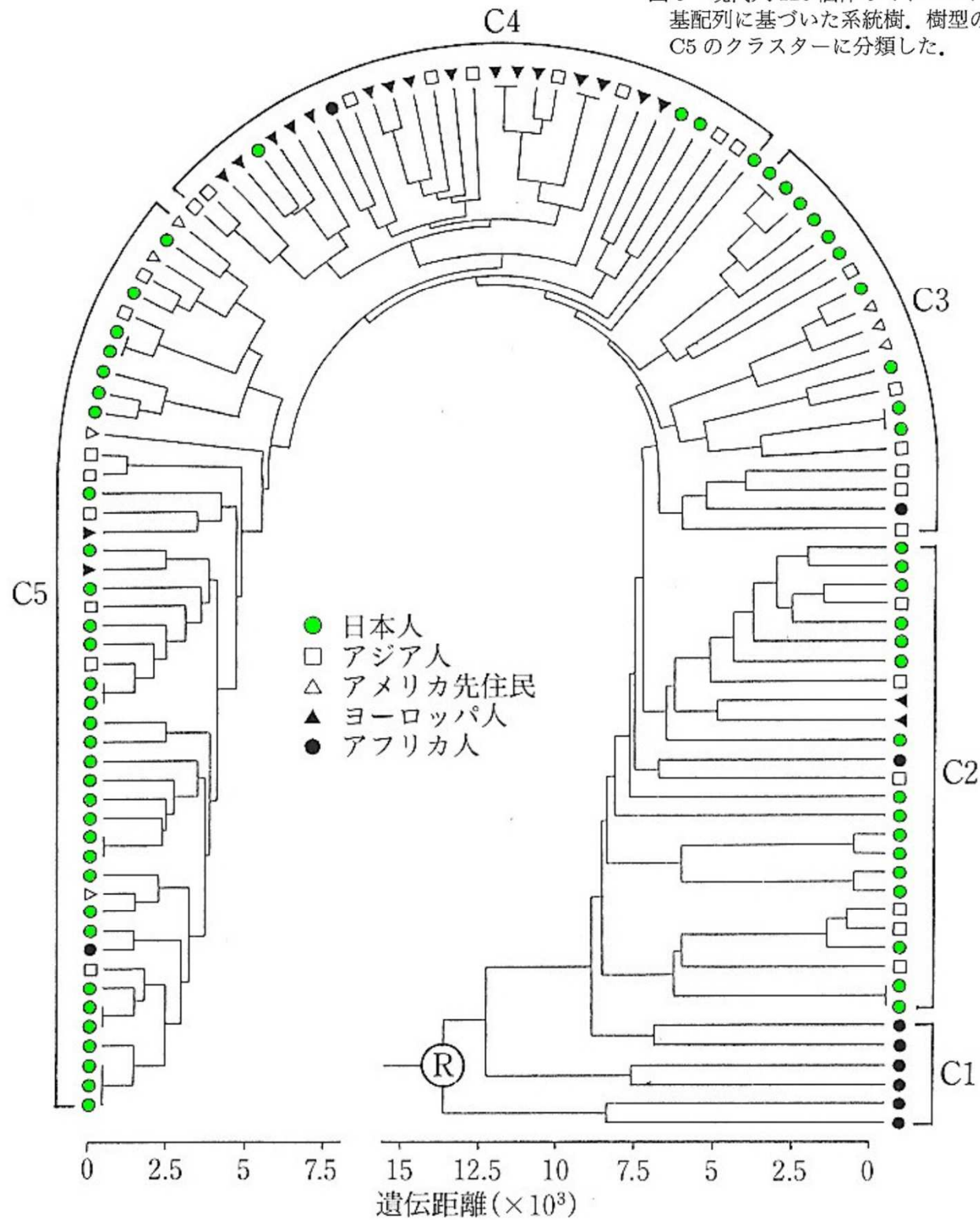


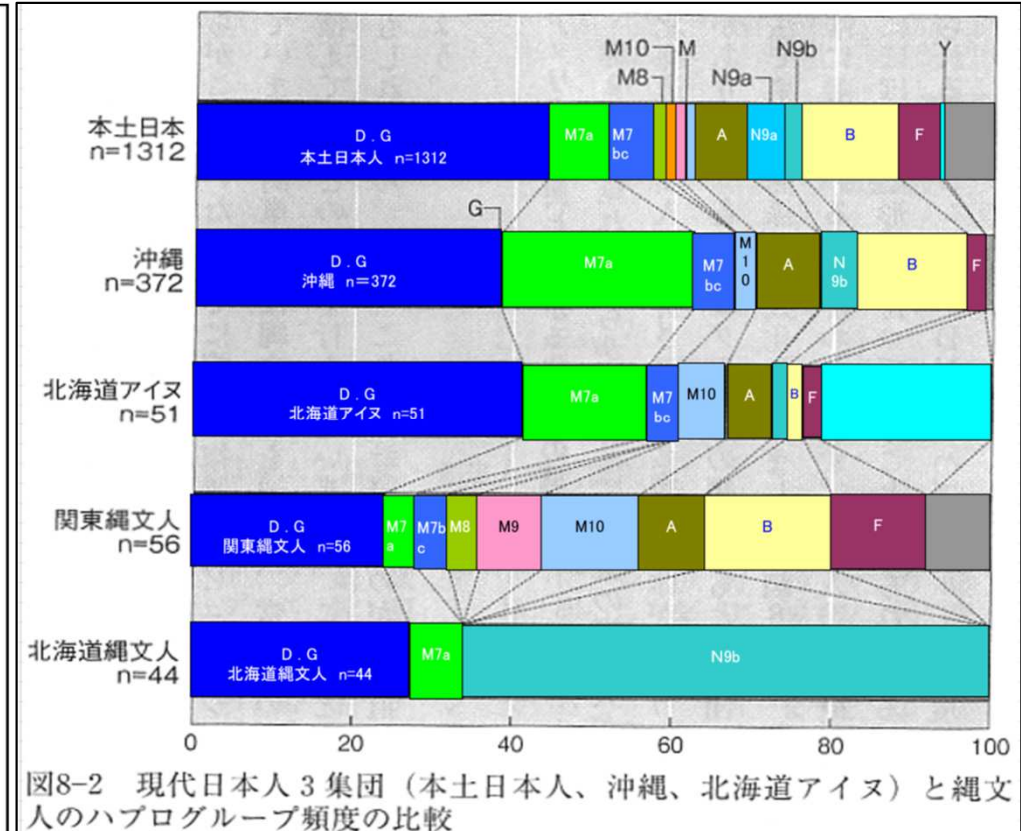
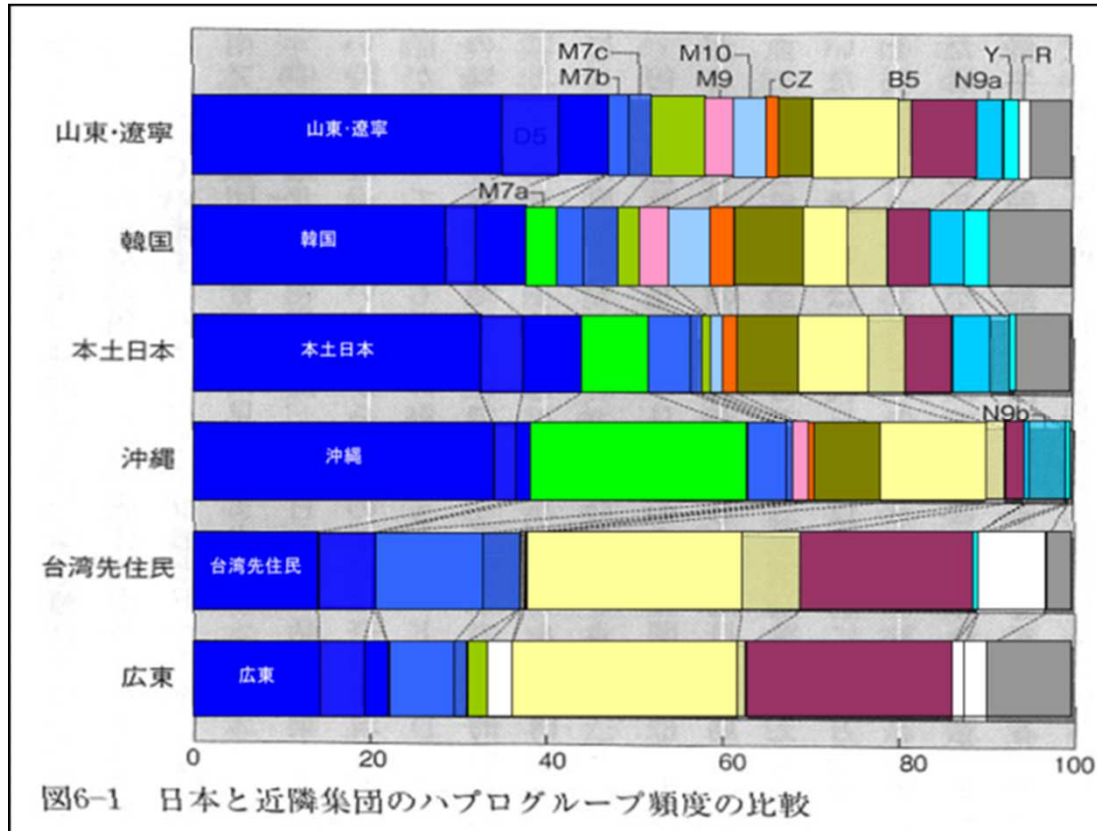
図5 現代人128個体のミトコンドリアDNAのDループ領域の塩基配列に基づいた系統樹。樹型のパターンより便宜的にC1からC5のクラスターに分類した。

日本人のmtDNA
は
極めて多様性
に
富んでいる



・「DNA人類進化学」 宝来聡著 より

東アジア人のミトコンドリア・DNAも多様性を持ち、同一のパターンを示す



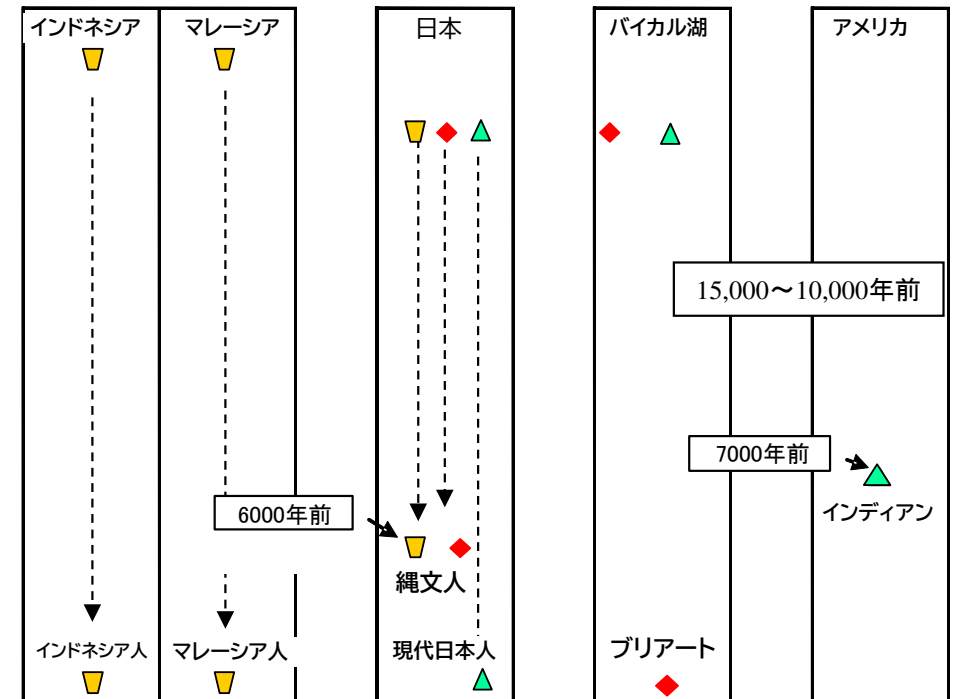
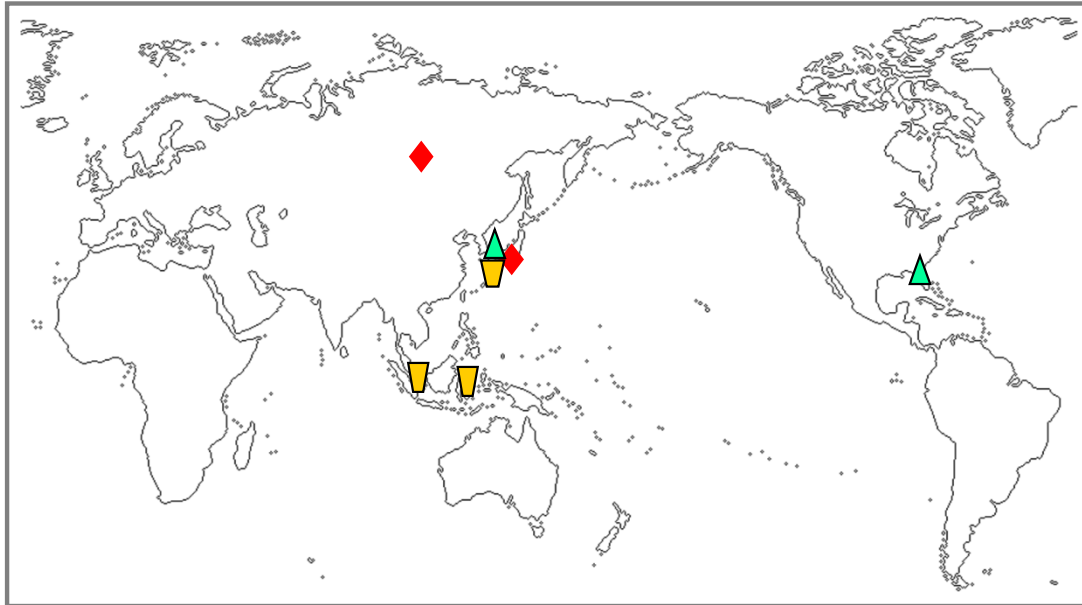
「日本人になった祖先たち」篠田謙一著 NHKブックス の図表に丸地彩色

- モンゴロイド揺籃の地スダ大陸で、多種多様なmtDNAを各民族が獲得したと推測する。
 - 左図のmtDNAの%表示のグラフを見ると、北方系の体躯をしている北部中国人・韓国人と本土日本人のパターンを比較してみると、多様性は、ほぼ同じです。右図の関東縄文人の多様性もほぼ同じです。
 - 台湾・広東の多様性はやや減少していますが、構成要素は同じタイプのmtDNAです。
- もし、北方系の民族が、アジアの西から北ヒマラヤルートで来たとする、この多様なDNAの母親達と一緒に来たことになります。
 - どの民族(Y遺伝子ベース)も同じように、多種類の遺伝子を持つ母親を連れて来たことになります。
 - 北方ルートは、多種類の民族が、多種多様なmtDNAを持つ新人(ホモサピエンス)が通り抜ける道だったことになります。
 - しかも、スダ大陸を経由した民族とmtDNAの種類を共有したことになります。
- 北方ルート説は、この現象を説明する必要があります。

ミトコンドリアDNAの謎

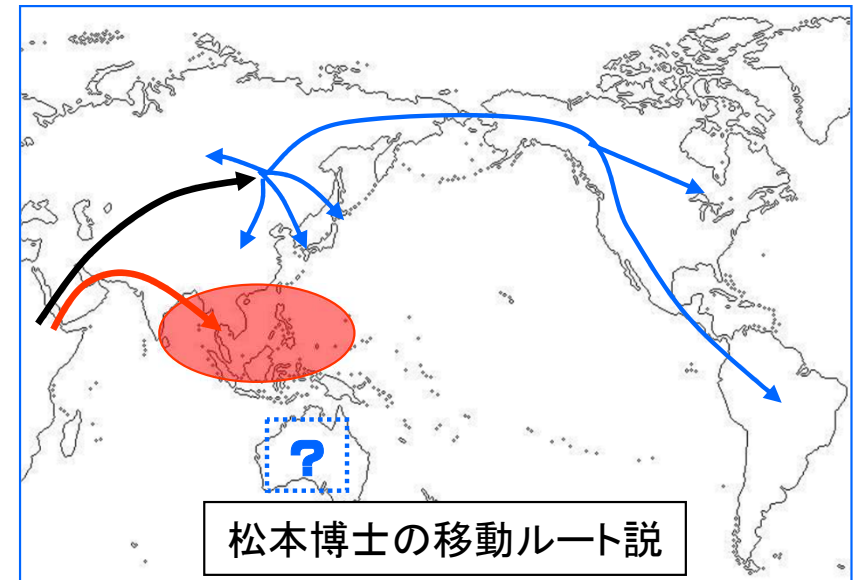
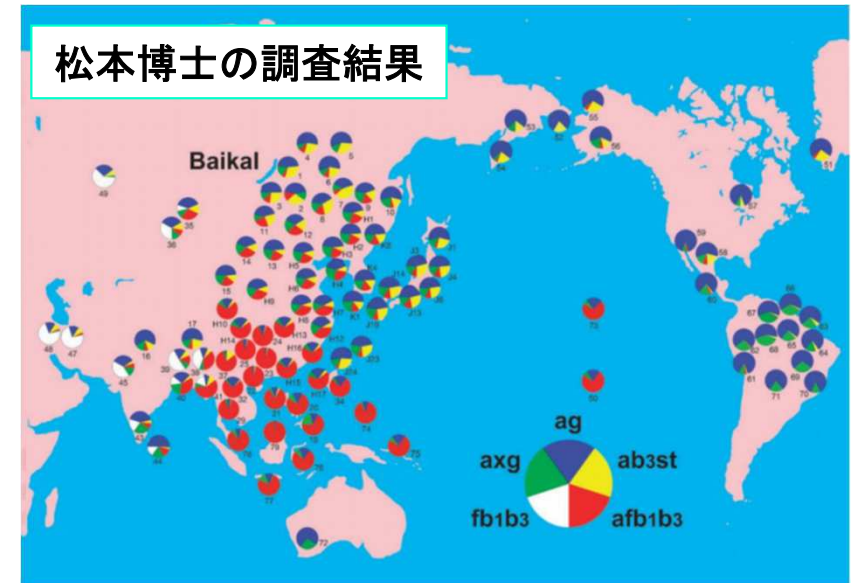
• ミトコンドリアDNA (mtDNA)

- 茨城県の中妻遺跡の縄文人のmtDNA がバイカル地域に住んでいるブリアートと同一。(篠田謙一と金井理)
- アメリカのフロリダの7000年前のミイラ化したヒトのmtDNAを解析したところ、日本人5人と共通するタイプ。(モンゴロイドの地球3の第4章から)
- 埼玉県浦和で発掘された縄文人の頭骨からmtDNAを解析した処、マレー人とインドネシア人と一致した。(モンゴロイドの地球3の第4章から)



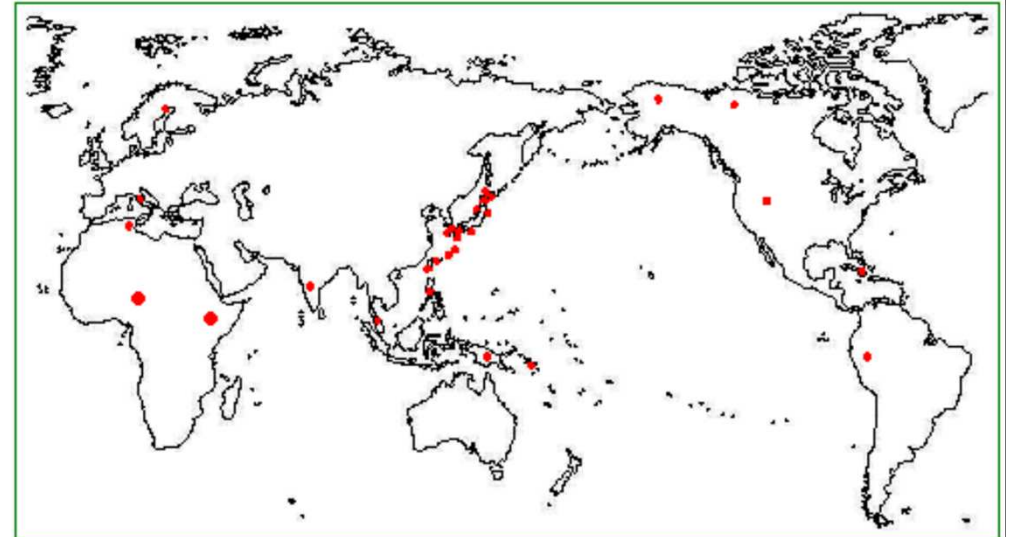
一般DNAに相当する免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子の分布

- 世界のモンゴロイド、130集団についての調査結果
免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子の分布図
 - ✓ 各地のデータを円グラフにまとめ、地図上に配置したもので調査結果の解釈・推論がしやすい明瞭な図は素晴らしい。
- 大阪医科大学名誉教授の松本秀雄博士の論文
- その松本説では、モンゴロイドには北方系と南方系があり、
 - 北方系モンゴロイドは、出アフリカ後直接**バイカル湖**へ移動し、そこから東西南北へ広がり、北へ向かった一群がアメリカ大陸へ渡り、南米にまで広がった。
 - 南方系モンゴロイドは、アフリカから**東南アジア**へ移動し、そこから、北上し、中国まで広がった。とする。
- 上記の説では、右の図のアボリジニイ(7万年～5万年前にオーストラリアへ移住)の遺伝子の説明が付かない)。何故、アメリカ大陸の原住民とオーストラリアの原住民のDNAが同じタイプで、同じような比率なのか？
- この貴重な調査と調査データの丸グラフを使った判り易い表記は明快で、素晴らしいが、松本秀雄先生の推論は違っていて、スダ大陸のゆりかごで育ったモンゴロイドの移動ルートで、説明が付く。



カギとなる事象と論文：ATLウイルスの感染ルート

- DNA遺伝子以外にも、人の遺伝と同じように、子々孫々に伝わって感染してきたウイルスがある。このウイルスの感染ルートは、家族内だけ、つまり母子間と夫婦間に限定されている。
- このウイルスはATLウイルスと云い、白血病を引き起こす。中公新書「新ウイルス物語」日沼頼夫著に記されている。
 - このウイルスのキャリア(感染経験者)は沖縄(琉球人)で33.9%、北海道のアイヌで45.2%で多く見られ、九州が7.8%とやや多く、四国一本州では1%未満のところが多く、東北では1%となっている。その外に、九州の宮崎県・鹿児島県・長崎県の離島海岸地域、四国・隠岐・紀伊半島南端・東北の飛島・牡鹿半島・山陸海岸などの僻地に多く発見された。
 - 日沼氏は、現地調査を行い、非常に古くから居住し、人の混血の機会の少なかった、離島や半島先端などと、沖縄・九州・北海道に、キャリアが発生していることから、**日本の先住民がこのキャリアを持ち、その後、日本に、移り住んだ人が混血すると、キャリアにはならないことを示した。**
- 世界的な調査が行われ、このウイルスのキャリアは、右の図の赤マークの地点で発見されている。
- HTLV-1は中央アフリカから人類の進化拡大に伴って、縄文人や南米アンデスの先住民などに伝えられたと想像されている。(東嶋和子著「死因事典」p132)
- 尚、韓国・朝鮮及び中国ではキャリアが発見されない。台湾の先住民にもキャリアは居ない。台湾のキャリアは日本人の移住者と思われる。東南アジアはまったくゼロではないが、ほぼ発見されない。
- ✓ 沖縄ではこのキャリアが多いがその中で**宮古島には、このキャリアは極端に少ない。「宮古島の人、沖縄の他の島と違って、日本先住民ではないからだろう。」**と日沼氏は記している。このことは、非常に興味深い。
 - ✓ 宮古島のこと：大野晋氏のタミル語と日本語の記述に、宮古の言葉が引用され、古くからタミルと同じ日本語が使われてきたことを示している。このことから、沖縄・琉球人が日本古来の人でありながら、何故、渡来人の日本語を使ったのか疑問に思っていたが、宮古島が古来からの琉球人とは異なる人が住む島であったことが判り、古来の沖縄・琉球人≠タミル語を使う人と判明し、長年の疑問がここで解消された。
 - ✓ 松本秀雄博士の免疫グロブリンG(Gm)の分布では、宮古島は、アイヌと同じレベルの、古い集団であったとしている。
- このATLウイルス調査の示された現象を説明できる日本人の起源論が望まれる。



Y-DNA

Y遺伝子 簡易表 日本・アジア
2014年10月Wikipediaより 抜粋・変換(100%換算)

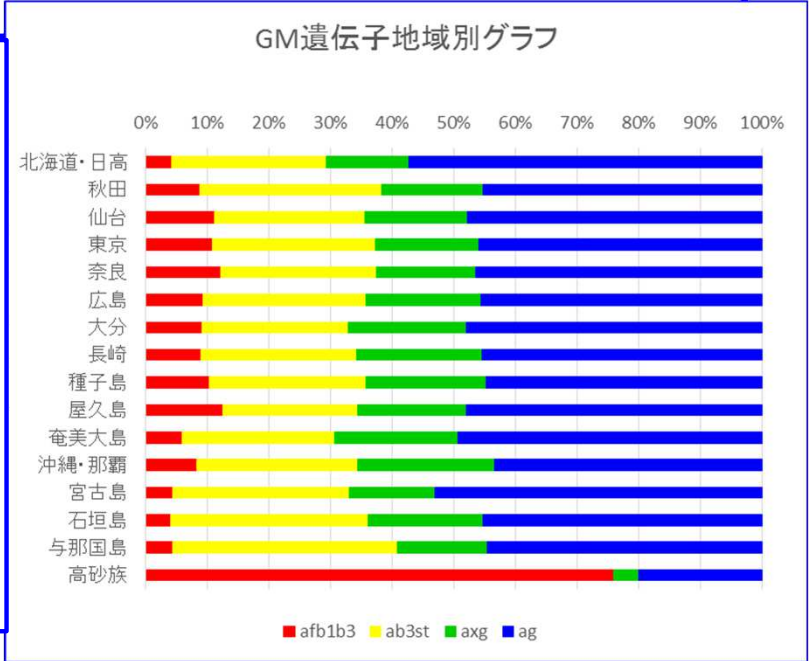
		C		DE			NO						
		C1	C3	D1	D2	D3	N	O1	O2a	O2b 1	O2b *	O3	
日本 (野中、水口)	日本	2	3	-	40	-	1	3	1	26	8	16	100
日本 (Tajima et al.)	アイヌ	-	13	-	87	-	-	-	-	-	-	-	100
日本 (Shinka et al.)	沖縄本島	4	-	-	65	-	-	-	-	14	-	17	100
	南沖縄	-	-	-	6	-	-	-	-	94	-	-	100
韓国 (Shin et al.)	韓国	-	10	-	-	-	4	4	-	-	32	49	100
東アジア北部 (Karafet et al.)	朝鮮	-	13	-	-	-	-	3	-	41	-	43	100
	漢民族(華北)	-	7	-	-	-	-	-	3	-	-	90	100

- 男だけに伝わる遺伝子「Y-DNA」を見ると、
 - D2がアイヌ・沖縄に多く、日本先住民＝旧石器人＝縄文人の遺伝子
 - NO系統が渡来系の人々のもので、特にO2b1は弥生渡来系の主軸の遺伝子
 - 南沖縄(宮古島を含む先島諸島)では、O2bの倭人が大多数で、極少数の先住民がいる。**
- 宮古島を含む南沖縄は、日本全体とは異なった、Y-DNAの構成を持つことが注目される。

Gm遺伝子の研究を行なった松本秀雄博士は、「宮古・石垣・世那国では、「赤 (afb1b3)」が非常に少なく、アイヌと同じ古い・純粋な民族である」と記した。先島諸島では、古くからの純粋な民族が住み続けてきたことを示している。

Y-DNAとGm遺伝子の両方を検討すると、
『宮古島には、古い・純粋な倭人＝弥生渡来人がいる。』

「弥生時代に渡来した民族の仲間が、もっと早い時期に＝先に、宮古島に、移住していたこと」を示している。



沖縄の特異性

- 沖縄は、DNAや医学の見地からも特異性が見られ、日本人の起源論を展開する上で注意が必要。
 - Y染色体:縄文人のD2(D1b)が多いが、弥生系のO2b1(O-47z)、O2b(O1b2)の比率は宮古島を含む先島諸島では、著しく高い島。
 - Gm遺伝子の研究では、宮古島を含む先島諸島の住民は、「アイヌと同じ古い・純粋な民族である」とする。
 - ATLウィルス感染の研究では、宮古島には、このキャリアは極端に少ない。「宮古島の人、沖縄の他の島と違って、日本先住民ではないからだろう。」と日沼氏は記している。
 - 大野晋氏の「日本語の起源－新版」の中で、宮古島の言葉にタミル語の共通する古い日本語を示した。
 - 沖縄と同様に、縄文系が強いと云われる北海道のアイヌは、縄文系の言語のアイヌ語を話す。沖縄では、日本語と同系の琉球語を話す。何故、この違いは出たのか？
- 注目に値する言語学上の発見がある。
 - 従来の定説
 - 琉球語と日本語とが同系の姉妹語であることを最初に科学的に論証したイギリスの言語学者チェンバレン(1850～1935)は、琉球語が、奈良時代以前に分かれた日本語の姉妹語であることを確証した。
 - 安本美典氏は、『琉球語は、およそ、千七百年前に、南九州から南下した言語とした。
 - 「日琉祖語の分岐年代」 Pellard, Thomas(2016)著
 - 上代語に残影さえない音韻対立を考慮にいれると、日琉祖語の分岐時代が 8 世紀以前、つまり日本の有史以前、であるという結論に至る。
 - 注:ここで云う8世紀は、古事記・日本書紀などの最古の文書が残された時代を言う。文献で追える時代以前＝有史以前に分岐が行われたことに成る。

沖縄列島の住民に関する現在の定説

- 現在の定説（沖縄・琉球について書かれた歴史書のほとんどが、この説に準拠）
 - スンダ大陸から沖縄・日本列島に新人(ホモサピエンス)が到来した。
 - 沖縄では、その新人達は、狭い島と云う生存の厳しい環境下で滅亡した。
 - 九州の縄文人がその無人の沖縄列島に南下し、沖縄の先住民となった。
 - 古墳時代以降に、本土日本人が沖縄に到来し、日本語が使われ、沖縄を支配した。
- 前述の「免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子」・「ATLウィルスの感染ルート」「琉球祖語」についても、上記では説明がつかない。
- 沖縄の歴史は、
 - 鹿児島大学・高宮広土教授の下記の趣旨をベースとしている。
 - ハリス線：湊川人の骨には、複数の飢餓を経験した痕が残っている。
 - このハリス線は、沖縄諸島では食料が欠乏する時期が発生し、人が生き続けることは困難だったことを示す。
 - 従って、彼らは、現在の沖縄人の祖先ではない可能性が高い。

表8 ハリス線の時代・

地域別出現率とその統計解析結果(成人)

	観察数	出現数(%)
縄文人	13	4 (30.8)
弥生人	263	96 (36.5)
古墳人	60	33 (55.0)
中世人	38	18 (47.4)
近世人	114	60 (52.6)
現代人	161	79 (49.1)

実は、ハリス線は、特異な現象ではない。左表のように、出現頻度は高く、絶滅の根拠とならない。

西南日本古代人のストレスマーカー 1. ハリス線について
古賀英也
九州大学医学部形態機能形成学講座 2002年人類誌



港川人1号レントゲン写真



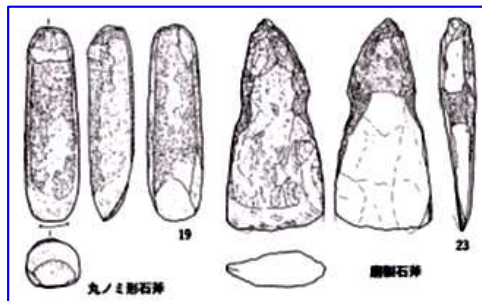
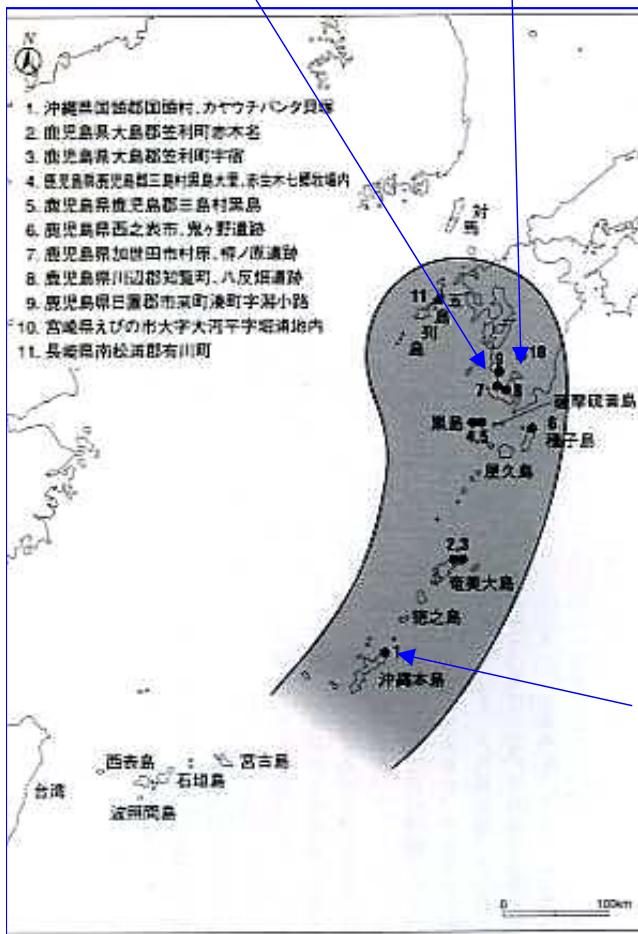
【写真：港川人1号（全身骨格）】

「沖縄から九州へ」の証拠 椿ノ原遺跡(14,000~12,000年前)・上野原遺跡(9,500~6,500年前)

38

椿ノ原遺跡

上野原遺跡



もう一つの縄文文化 実は貝文文化
縄文草創期(14000~)

- ・ 食生活が変わり、土器を使用し、定住が始まった時代。東北の縄文と異なり、土器に貝の文様が入る。
- ・ 横型の石斧と縦型丸ノミ型石斧が出土。
 - ✓ 大木を伐採し、丸木舟を建造した民族。
 - ✓ 沖縄本島から九州西南部へ広がる。
- ・ 椿ノ原が火砕流に埋まった後は、丸ノミ型石斧は、太平洋沿岸の静岡方面まで拡大。



上野原遺跡 (9500~6500年前)

- ・ 日本列島最古の集落跡。石蒸し料理施設の集石39基、燻製料理施設の連穴土抗(炉穴)19基、道跡(二筋)、多数の土抗や生活跡。
- ・ 同じ遺物包含層から曾畑式土器・深浦式土器(前期), 並木式土器(中期), 指宿式土器・市来式土器(後期), 上加世田式土器・入佐式土器・黒川式土器・刻目突帯文土器(晩期)等が混在して出土している。
- ・ 時代が下がると、 → 石斧は全面研磨の時代となる。先島諸島から沖縄・九州に広がり、更に日本海沿岸を上り、秋田・青森まで出土する。

小田静夫氏の論文より借用

琉球・沖縄の歴史と人の動き

- この琉球・沖縄の歴史と人の動きは、詳細に検討する必要がある。
- 考古学遺跡・遺物から見ても、強い疑問が生じる。
 - 九州の縄文人の南下説：
 - これは、北上する巨大な黒潮の流れに逆らい、しかも横断する航路
 - » 九州から奄美に渡るには、トカラ海峡の横断が必要。
 - » 黒潮の平均流速は5km/h、最大流速は7km/hで、幅は100km。
 - 手漕ぎの舟では、黒潮を遡行することは、困難。有り得ない。(流されながら横断は易しい)
 - 断絶の時期は、1万2千年～7千年(縄文土器発見)までの期間。
 - 従って、1万2千年～7千年の期間中に縄文人が南下したことになる。
 - 九州の縄文人は、その期間に、どんな状況だったのか？
 - » 約1万2千年前の薩摩火山噴火
 - » 約9,500年前、桜島が噴火
 - » 約 7,300 年前鬼界カルデラの破局的噴火
 - 九州は、相次ぐ火山噴火と降灰で、生存が困難な時期
 - » 九州から東へ移住はあった。石斧の形式の変化で判る。
 - » 困難な黒潮の遡上・横断航路は、有り得ない。
- DNA・免疫グロブリンG(Gm)の標識遺伝子・ATLウイルス・言語など特異性を示す琉球・沖縄は、日本人の起源を探る意味で、要注意の地域。

弥生渡来人

- 弥生人の概要・一般的な理解
 - 縄文人が暮らしていた日本列島へ、紀元前3世紀頃に、弥生人が、水田稲作と金属器(青銅器・鉄器)を持って渡来し、九州から本州北部まで短期間で、ほぼ、日本全土に弥生文化を広め、縄文時代が終わった。
 - 北海道・沖縄に関しては、弥生文化の浸透は遅れた。
- 論議の分れる処
 - 渡来時期 : 炭素14年代測定法で計測した結果、弥生時代の開始時期は、3,000年前とする説が出た。
 - 渡来人数 : 渡来は多数回行われ、累計100万人が渡来したとの説がでた。渡来回数と人数が課題
 - 渡来ルート : 朝鮮半島から渡來說と大陸からの渡來說があり、ルートが課題
 - 渡来人の出生 : 大陸から来たとして、どのようなルートで中国大陸に来たのかが課題
 - 渡来人の言語 : 縄文人の言語との関係が課題 琉球祖語との関係が課題
 - 文字の使用 : 弥生時代の硯の遺物が多数発掘され、文字の使用が課題
- 文化・風習・政治制度(検討されたとはあるのか?)
 - 里山の風景(田と里山を基盤とする村落)、日本古来の風習(田の神・山の神、お盆・正月・小正月、鳥居・道祖神・神社、箸、)、家族制度・社会制度(父系/母系社会、墓制、規律・罰則、税制、市)、文字・言語
 - 倭人との関係
- 徐福渡來說
 - 中国の文献:史記などには、秦の時代に、多数の帆船と人員を引き連れて東方海上(日本)へ出立した徐福のことが記述されている。
 - 中国では、徐福村や住民の家系図が発見され、史実と見られている。
 - 日本では、徐福の渡来伝説が30カ所で認められるが、信憑性に欠け、歴史家は一切認めていない。

弥生時代の開始・水田耕作を伴う渡来は2回、別ルートで

	1次渡来民（初期水田耕作民）	2次渡来民：倭人
土器	韓半島の松菊里・固城遺跡で出土する無紋土器 夜臼式土器	遠賀川式土器(弥生式土器) (板付式)
集落 水田 耕作地	環濠集落も一部に見られる。 中小河川又は谷間の流れを灌漑に利用した水田を構築。 不安定な稲作を補完するために、海洋性食料を獲っていた。 海岸沿岸又は、河口に近い河川沿いに集落を構築。	環濠(壕)住宅も見られる。 山沿いに灌漑水路を設け、自然河川に排水する 高度な灌漑技術を駆使した水田(水を抜くと乾田になる) 現在の水田と同様に、平野部、河岸段丘などを耕作地とすること可能。 海岸から離れた地域も耕作地、集落用地となった。
イネの 品種	極短小米 ：韓半島の松菊里・固城遺跡と同一種で 長江下流域(春秋呉の支配地)の松澤・銭山漾遺跡 の品種と同一	極短小米は消滅。 やや長い小粒米 が全国に展開。韓半島には同一品種のイネは ない 山東半島付け根の地域の焦庄遺跡〔徐福村に近い〕と同一品種
住居	松菊里型住宅 (方形又は円形)と 従来型の 竪穴住宅 との併用 集落により比率は違う	高床式住宅 寒さ対応された床下が板材で覆われた高床式住宅 (この住宅を誤って竪穴住居として復元している)
墓制	基盤式支石墓：支石の下には土壌又は木棺 韓半島南部に多い方式 / 中国浙江省にも源流が見られる方式	甕棺墓 が特徴的 支石墓の下に甕棺を置くことがある 木棺墓・石棺など
武器	青銅製剣・磨製石剣・磨製矢じり	青銅製剣・矛・戈 鉄剣・矛 銅鏃 連弩
人種	支石墓に眠る人骨は、 低顔・低身長 の縄文人の特徴を持つ	高身長・長頭・シヨベル型前歯 (上の前歯が下の前歯に覆い被さる・現代人と同じ) 中国長江河口から山東半島までの海岸沿いの人々に類似 韓半島人にやや類似
	渡来した民族は、韓半島に逃避していた中国難民(春秋の呉の末裔) 人数は数百人規模以内?	
渡来時期	春秋呉の滅亡BC473年より後 → BC400年付近か?	BC219年とBC210年

初期の水田耕作と 次期の水田耕作



「東アジアの稲作起源と古代稲作文化」

和佐野喜久雄編によると、

- 初期水田耕作の極短粒米は、
 - 春秋の呉の本拠地に近い崧沢遺跡・銭山漾遺跡と韓半島の松菊里・固城遺跡から出土。
 (山東半島・遼東半島・朝鮮半島北部からは出土しない。)
 - 海路で長江下流域から直接、韓半島へ渡り、韓半島から日本へ渡ったものと推定された。

- 次期水田耕作のやや長い小粒米は
 - 山東半島付け根の焦庄遺跡のものと同じ
 - 上記の極短小粒米は消滅し、やや長い小粒米が日本全土に広がる。
 - 焦庄遺跡は徐福村に近接。

- ✓ 韓半島南部に多い碁盤式支石墓も、長江河口の南の温州から出土し、東夷の墓制。温州は、呉の伍子胥の出身地。
- ✓ 春秋・呉の難民が韓半島に多く渡来したとの記述あり。

倭人

倭人について:中国の歴史書に中国に居た「倭人」が出てくるが、この倭人と日本に移り住みついた倭人とは関係が有るのか？

『中国に居た』

- 後漢の王充編「論衡」:周の時代に天下泰平で、越裳、白雉を献じ、倭人、暢草を献す。
四川省で有名な不老不死のキノコの暢草 を倭人が献上したとの記述。BC1100年頃か
- 後漢書(巻90)列伝・鮮卑の条 : 紀元178年、鮮卑族が、東に行き倭人・千余家を得て、移住させ、秦水(黄河の支流)に移住させ、魚を取らせ、食料としたとの記述。
 - 移住させ秦水の位置は、甘肅省 天水市で、西安の更に西200kmの山中ですので、その東は、西安から渤海までの広大な地域になり、倭人千余家のあった地帯は推測が付きません。
- 山海経 : 戦国時代から秦朝・漢代(前4世紀 - 3世紀頃)の地誌
 - 蓋(がい)国は鉅燕の南、倭の北にある。倭は燕に属する。
 - 蓋国は山東半島の中央にあった小国 倭の北にあり=倭は山東半島中央の南にあったことになる。
 - 燕の極盛の時期(BC285年ころ)には、山東半島も領有していた。
 - 倭は、山東半島の南部に居たことになる。
- 『日本の倭人』
 - 漢書・後漢書・三国志など多数の中国史書で、東方海中=日本に居る倭人を記している。
 - 後漢書では、倭人を徐福の子孫としている。

- 旧石器人・縄文人の渡来
 - 出アフリカ後、ヒマラヤ北ルートは有り得るのか？
 - 4～3万年前の日本列島へは、どのルートで来たのか？
 - 古代人は帆を使えたか？
- 沖縄の古代の歴史の真実は？
- 弥生渡来人
 - 渡来時期 ----- 弥生の開始時期は、3千年前か？
 - 渡来人数・渡来ルート ？
 - 渡来人の出生地、言語、文字使用は？
- 弥生渡来人と徐福の関係

次回以降のテーマ案

1. 沖縄の古代の歴史の真実は？

2. 旧石器人・縄文人の渡来

- ・ 出アフリカ後、ヒマラヤ北ルートは有り得るのか？
- ・ 4～3万年前の日本列島へは、どのルートで来たのか？
 - 古代人は帆を使えたか？

3. 弥生渡来人と徐福の関係

(大陸との交流と重なる)

4. 弥生渡来人

- 渡来時期 ---- 弥生の開始時期は、3千年前か？ (年代論と重なる)
- 渡来人数・渡来ルート ？
- 渡来人の出生地、言語、文字使用は？